東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野・
東京大学医学部家族看護学教室

年　報 (第4号)

平成11年4月～平成13年3月

東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野・

東京大学医学部家族看護学教室

年　報 (第4号)

平成11年4月～平成13年3月

目　次

はじめに 1

1．教育活動

1-1．担当講義・実習 2

1-2．卒業論文，修士論文，博士論文 4

2．研究活動

2-1．研究費 5

2-2．学術研究業績 7

2-3．学内外の公的活動 23

2-4．国際交流活動 24

2-5．海外学術活動援助 26

3．教室カンファレンス 27

4．教室の沿革（平成 11～12 年度） 35

5．資料 37

はじめに

家族看護学教室年報第４号が出来上がりました。皆様にお届けいたします。
家族看護学教室は平成４年 10 月にスタートし、すでに満８年が経過いたしました。３号以降の教室員の移動では、平成 12 年４月山本講師の研究休職に伴い法橋助手が講師に昇任されたこと、同年７月１日に小林奈美助手を迎えたこと、そしてこの４月から法橋講師は神戸大学医学部保健学科助教授に昇任、前原助手は千葉大学看護学部大学院博士課程に入学とそれぞれ新しいスタートラインに立ちます。どうぞ、存分にご活躍ください。もう一人、教授室秘書として滝沢枝里さんが昨年５月に着任しました。
ところで、平成 11 年４月に国際学術交流を教室に定着させることを目的にスタートさせた「大学院生・卒論生への海外学術活動援助」は、一定の基準を満たした場合、渡航費の一部を杉下奨学金（仮称）として支援するものです。この事業のヒントは平成 10 年度修士１年生松井典子さんが大学院生として初めて国際学会（IEEE 学会：Hong Kong）で口頭発表したことです。平成 11 年度は博士２年の森那美子さん（ポスターセッション）、平成 12 年度は博士２年工藤祐子さんと同１年河田みどりさん（いずれも口頭発表）がこの事業の援助を受け海外の学会で研究成果を発表しました。この事業の対象外ですが平成 12 年度修士２年日下修一さんは３ヶ月間修士論文のため英国へ調査に出かけました。さらに、平成 11 年５月 4〜8 日タイクリスチャン大と当教室で共催した「The International Nursing Seminar on Health Problems in Tropical Countries, AIDS, and Primary Health Care:Nurses' Perspectives」（タイで開催）、平成 12 年８月 29〜31 日にカナダカルガリー大ライト教授ベル准教授を迎えて開催した「家族看護ワークショップ」、平成 13 年２月 23 日学科長である杉下の主催で行った「The 2nd Conference on Nursing Education & Research between School of Nursing, Seoul National University and School of Health Sciences and Nursing, The University of Tokyo」（後者は東大で開催）は教室員が国際カンファランスの運営を経験しました。
２年間のこれら経験は国際学会へのアレルギー反応を減弱させ、院生達に自信と勇気を与えたように感じています。うれしい限りです。
この２年間の学術活動では、論文 61（内 原著 20｛英文 5｝）、学会発表 39（内 国際学会 17）と前２年間より大きく増えました。卒論生（前田美穂さん、湯原なお子さん、原田幸一君）、修論生（河田みどりさん、松井典子さん、日下修一君）、博士論文生（森田将典さん（論博）、森那美子さん、内藤直子さん（順大））がそれぞれ無事修了し学位を得られたこと、文部省科研費（11 年度７件、12 年度５件）、厚生省科研費（両年度２件）、その他研究費（両年度７件）が合計 21 件採択され、順調に研究活動が維持できたことは、教室員の努力の成果です。
平成 11〜12 年度の非常勤講師は大学院：田中哲郎先生（国立公衆衛生院部長）、鳥居央子先生（北里大学看護学部教授）、石井享子先生（国立公衆衛生院室長）、学部：高橋真理先生（愛知県立看護大学教授）、須貝祐一先生（浴風会病院精神科科長）、渡辺裕子先生（家族看護研究所）にお願いし、この他多くの先生方のご協力を得て無事に教育を修了することができました。ご支援ありがとうございました。
本年報第４号（平成 11〜12 年度）は前原助手のご尽力で出来上がりました。ありがとうございました。この２年間杉下は本学健康科学・看護学科学科長を務めさせていただきました。教室員のご協力に改めて深く感謝申し上げます。

平成 13 年３月
杉下　知子

１．教育活動

1-1. 担当講義・実習

平成１１年度 家族看護学教室 担当講義・実習一覧

【学部】

講義名	履修	単位	学年	開講時期*および時間	
病態生理免疫学	必修	1	３年	前期Ⅱ	木　9:00～12:10
保健学実験･検査法実習	必修	3	３年	前期Ⅲ	9月13日～10月15日の３日
小児看護学	看護必修	1	３年	後期Ⅰ	月　9:00～12:10
母性看護学	看護必修	1	３年	後期Ⅰ	月　9:00～12:10
老年看護学	看護必修、選択	2	３年	後期Ⅱ	月　9:00～12:10
家族看護学	看護必修、選択	2	３年	後期Ⅱ	火　13:00～16:10
老年看護学	看護必修	2	４年	前期Ⅰ	木　9:00～12:10
老年看護学実習	看護必修	3	４年	前期Ⅱ	6月21日～7月9日
小児看護学	看護必修	2	４年	前期Ⅲ	月　9:00～16:10
母性看護学	看護必修	2	４年	前期Ⅲ	水　9:00～16:10
老年看護学	看護必修	2	４年	前期Ⅲ	木　9:00～16:10
小児看護学実習	看護必修	3	４年	後期Ⅰ	10月18日～11月５日
母性看護学実習	看護必修	3	４年	後期Ⅱ	1月11日～1月28日

開講時期*

前期Ⅰ	４月　５日～　５月２８日	８ｗ	
前期Ⅱ	５月３１日～　７月１６日	７ｗ	(夏休み　７月１９日～８月２７日)
前期Ⅲ	８月３０日～１０月１５日	７ｗ	
後期Ⅰ	１０月１８日～１２月　３日	７ｗ	
後期Ⅱ	１２月　６日～　２月　４日	７ｗ	(冬休み　１２月２７日～１月　７日)
後期Ⅲ	２月　７日～　３月　４日	４ｗ	

【大学院】

家族看護学特論Ⅰ　　４月～９月

家族看護学特論Ⅱ　１０月～２月

平成１２年度　家族看護学教室 担当講義・実習一覧

【学部】

講義名	履修	単位	学年	開講時期		曜日	時間
病態生理免疫学	必修	1	3	前期Ⅱ-3	平成12年7月3日～平成12年7月21日	木	9:00～12:10
保健学実験･検査法実習	必修	3	3	前期Ⅲ	平成12年9月18日～平成12年10月20日の3日間		9:00～17:50
母性看護学	看護必修	分1	3	後期Ⅰ-1	平成12年10月23日～平成12年11月17日	月	9:00～12:10
小児看護学	看護必修	分1	3	後期Ⅰ-2	平成12年11月20日～平成12年12月8日	月	9:00～12:10
老年看護学	看護必修、選択	分2	3	後期Ⅱ-1,2	平成12年12月11日～平成13年2月9日	月	9:00～12:10
家族看護学	看護必修、選択	2	3	後期Ⅱ-1,2	平成12年12月11日～平成13年2月9日	火	13:00～16:10
老年看護学	看護必修	分2	4	前期Ⅰ-1,2	平成12年4月10日～平成12年6月2日	木	9:00～12:10
老年看護学実習	看護必修	3	4	前期Ⅱ	平成12年6月26日～平成12年7月7日	月～金	9:00～16:00
小児看護学	看護必修	分1	4	前期Ⅲ-2	平成12年9月25日～平成12年10月13日	月	9:00～12:10
母性看護学	看護必修	分1	4	前期Ⅲ-2 (後期に振替え)	平成12年9月25日～平成12年10月13日 （平成13年1月4日～平成13年1月5日）	月	13:00～16:10 (9:00～16:10)
小児看護学実習	看護必修	2	4	前期Ⅲ-3,後期	平成12年10月16日～平成12年10月30日	月～金	8:00～15:00
母性看護学実習	看護必修	2	4	後期	平成13年1月9日～平成13年1月26日	月～金	8:00～15:00

【大学院】

家族看護学特論Ⅰ　4月～9月
家族看護学特論Ⅱ　10月～2月

【休業】

夏季休業　平成12年7月24日～平成12年9月1日
冬季休業　平成12年12月25日～平成13年1月8日

1-2. 卒業論文，修士論文，博士論文

平成 11 年度

卒業論文

前田美穂：小児病棟における家族の付き添いの実態調査および家族機能に及ぼす影響に関する研究－FFFS 日本語版Ⅰの開発とそれを用いた家族機能の評評価をもとに－
（指導教官：法橋尚宏）

湯原なお子：修学旅行における高校生の心の適応と日常の学校生活との関係
（指導教官：杉下知子）

修士論文

河田みどり：産褥期乳腺炎発症に関与する要因の細菌学的分析（指導教官：杉下知子）

松井典子：Evaluation of Baroreflex Sensitivity in the Elderly: Comparison of Bivariate Autoregressive model and Sequence Method Using a New Device
（高齢者の圧受容器反射感受性評価－２次自己回帰モデルとシークエンス法の比較－）
（指導教官：杉下知子）

論博

森田将典：Pharmacokinetics and Biochemical Properties of Human Prourokinase Variants Carrying the Deletion or Amino Acids Substitutions in the Epidermal Growth Factor-like Domain
（上皮成長因子様ドメイン内に欠失またはアミノ酸置換を導入したプロウロキナーゼ変異体の血中動態と生化学的性状）

平成 12 年度

卒業論文

原田幸一：東京都Ａ区における乳幼児アレルギー健康審査の追跡調査－10 年後の有病率と疾病危険因子を中心として－（指導教官：法橋尚宏）

修士論文

日下修一：日本と英国イングランドにおける近現代看護の変遷と文献的検討－看護制度の法的特徴、在宅看護における看護の自律性について－（指導教官：杉下知子）

博士論文

森那美子：メチシリン耐性黄色ブドウ球菌の院内感染およびその防止に関する研究
（指導教官：杉下知子）

論博（順天堂大学）

内藤直子：相対心拍率からの産婦のリラックス度の簡易判定法に関する検討

２．研究活動

2-1. 研究費

平成 10 年度，平成 11 年度　文部省科学研究費補助金（基盤研究(B)(2))
杉下知子，法橋尚宏（研究課題番号 10470528)
妊産婦･新生児の感染予防と看護サービスの質－A 産院での MRSA 等の分析から－

平成 10 年度，平成 11 年度　文部省科学研究費補助金（奨励研究(A))
山本則子（研究課題番号 100771379)
神経内科患者･家族の退院後の困難と看護職による退院指導の関係

平成 10 年度，平成 11 年度　文部省科学研究費補助金（奨励研究(A))
法橋尚宏（研究課題番号 10771378)
小児科病棟における母親の付き添いが家族機能におよぼす影響に関する研究

平成 11 年度　笹川医学医療研究財団「高齢者の医学医療に関する研究助成」
山本則子，杉下知子
痴呆高齢者家族介護者の介護健康度アセスメントスケールの開発

平成 11 年度，平成 12 年度　文部省科学研究費補助金（基盤研究(B)(2))
杉下知子，山本則子，熊田衛（研究課題番号 11557208)
虚弱高齢者の運動機能性及び自律神経活動を高める下肢受動運動機器の開発

平成 11 年度，平成 12 年度　文部省科学研究費補助金（萌芽的研究）
杉下知子，林邦彦，山本則子，法橋尚宏，三橋邦江（研究課題番号 11877433)
二次元スケールを用いた家族システムとケア行動のアセスメントツールの開発

平成 11 年度，平成 12 年度　文部省科学研究費補助金（萌芽的研究）
鳥居央子，森秀子，杉下知子（研究課題番号 11877437)
家族と家族看護についての看護職者の認識と教育に関する研究

平成 11 年度　長寿社会福祉基金助成事業「在宅で介護にあたる家族を支援する為のマニュアル作成事業」
委員長：竹中浩治，主任研究者：杉下知子，委員：西島英利，石垣和子，川越博美，鈴木和子，山田美和子、渡辺裕子

平成 11 年度，平成 12 年度　文部省科学研究費補助金（奨励研究(A))
小林奈美（研究課題番号 11771541)
都市に居住する高齢者の公的介護・看護サービス利用の形態に影響する因子の検討

平成 12 年度痴呆高齢者の予後追跡調査研究事業
委員長：杉下知子，委員：丸井英二，松村康弘，林邦彦，山本精一郎，小林奈美，吉田亮一，須貝佑一，橋谷トミ，田近松枝，嶋澤美鈴

平成 12 年度東京都文京区
主任研究者：岩田力，分担研究者：杉下知子，法橋尚宏
乳幼児アレルギー健康診査とその追跡調査－10 年後の有病率と疾患危険因子について－

平成 12 年度財団法人フランスベッド・メディカルホームケア研究・助成財団
工藤祐子，杉下知子，萬田良子，高添正和，積美保子，福田泰子，伊藤美智子，大塚喜人
在宅宅中心静脈栄養療法患者の感染予防用簡易クリーンベンチ開発のための基礎的研究

平成 12 年度日本科学財団笹川科学研究助成金
宮越幸代，杉下知子
タイにおける HIV 感染者の子どものヘルスプロモーションに影響を与える養育要因の分析

平成 12 年度東京大学学術研究奨励資金による国際交流助成事業
杉下知子

平成 12 年度，平成 13 年度　文部省科学研究費補助金（奨励研究(A)）
法橋尚宏（研究課題番号 12771485)
新しく開発した Feetham 家族機能調査日本語版を用いた家族機能の評価―在宅看護および医療機関内看護が家族機能におよぼす影響を中心に―

2-2. 学術研究業績

論文（原著論文・総説）

Yamamoto-Mitani N., Abe T., Yamada Y., Yamazato C., Amemiya H., Sugishita C., Kamata K.: Reliability and validity of a Japanese quality of life scale for the elderly with dementia, Nursing and Health Sciences, 2 (2), 69-78, 2000

Yamamoto-Mitani N., Tamura M., Deguchi Y., Ito K., Sugishita C. : The attitude of Japanese family caregivers toward the elderly with dementia, International Journal of Nursing Studies, 37, 415-422, 2000

山本則子, 杉下知子：神経疾患を持つ患者及び家族に対する退院指導：ナースと患者・家族の認識の比較, 家族看護学研究, 5 (1), 3-8, 1999

山本則子, 杉下知子：退院指導と退院後の問題発生予測の評価ー退院後の問題発生との対応からー, 日本看護科学学会誌, 20 (2), 21-28, 2000

法橋尚宏, 前田美穂, 杉下知子：FFFS（Feetham 家族機能調査）日本語版の開発とその有効性の検討, 家族看護学研究, 6 (1), 2-10, 2000

法橋尚宏, 松本和史, 杉下知子：全国の訪問看護ステーションにおける MRSA の実態調査ー MRSA 陽性患者の把握と在宅ケア上の問題点を中心としてー, 家族看護学研究, 4 (2), 119-124, 1999

Mori N., Hitomi S., Okuzumi K., Yoneyama A., Sugishita C., Kimura S. : Susceptibility to Vancomycin of Mthicillin-Resistant *Staphylococcus aureus* Isolated in a University Hospital in Japan, 感染症学雑誌, 74 (11), 966-972, 2000

森那美子, 伊藤輝代, 対馬ルリ子, 法橋尚宏, 平松啓一, 杉下知子：産科病院で分離した Methicillin 耐性 *Staphylococcus aureus* の細菌学的・分子疫学的解析, 環境感染, 14 (4), 296-302, 1999

Matsui N., Ju K., Ohmori N., Sugishita C., Kumada M. : A new device for evaluating autonomic nervous activity of cardiovascular system, Biomedical Sciences Instrumentation, 36, 87-92, 2000

松井典子, 山本則子, 小西薫, 新橋良一, 周起煥, 熊田衛, 杉下知子：ジェット水流運動が虚弱高齢者の循環動態に及ぼす影響, 聖路加看護大学紀要, 25, 9-16, 1999

松井典子, 周起煥, 杉下知子, 熊田衛：安静時, 受動および能動運動時の圧受容器反射感受性評価, 自律神経, 37 (1), 89-94, 2000

前田美穂, 法橋尚宏, 杉下知子：入院患児への家族の付き添いに関する実態調査ー東京都内の病床数 100 床以上の病院を対象としてー, 家族看護学研究, 5 (2), 94-100, 2000

松本和史，法橋尚宏，杉下知子：訪問看護利用者と家族の間でのMRSA伝播および訪問看護婦・士の感染防止対策の検討，日本公衆衛生学会誌，48 (3)，190-199，2001

中谷弥栄子，法橋尚宏，杉下知子：肥満度別にみたホワイトノイズによるストレスの循環動態に及ぼす影響，民族衛生，65 (4)，208-218，1999

矢野久子，広瀬幸美，新村純子，石黒千映子，飯室美智子，平井栄利子，杉下知子，小玉香津子，松島肇：在宅医療廃棄物の適正処理に関する訪問看護ステーション管理者の意識および患者・家族の相談・指導内容－富山県の場合－，医療廃棄物研究，13 (1. 2)，1-10，2000

大嶺ふじ子、宮城万里子、儀間繼子、島尻貞子、佐久本薫、杉下知子：不妊治療を受けた妊産褥婦の不安と対児感情について，母性衛生，41 (4)，439-443，2000

大嶺ふじ子，浜本いそえ，小渡清江，宮城万里子，砂川洋子，杉下知子：高校生の性知識・性意識を高めるためのピア・エデュケーションの研究，日本看護科学会誌，19 (3)，64-73，1999

三橋邦江，森恵美，前原澄子：働く母親の適応に関連する要因の分析，日本看護科学会誌，19 (3)，1-10，1999

小林奈美：都市に居住する要介護高齢者の在宅死の特徴とそれに関連する要因の検討-訪問看護指導対象者の調査から-，日本老年看護学会誌，5 (1)，59-70，2000

Yamashita H., Tsukayama H., Hori N., Kimura T., Tanno Y. : Incidence of Adverse Reactions Associated with Acupuncture，J Altern Complement Med，6 (4)，345-350，2000

Chieko Sugishita：Development of Family Nursing in Japan－Present and Future Perspectives，Journal of Family Nursing，5 (2)，239-244，1999

杉下知子：看護職の専門性—領域拡張への提言，看護教育，40 (4)，315-321，1999.

杉下知子：家族の機能と健康を考える—家族システムとして考える視点—，健康管理，539，4-8，1999

杉下知子：日本の家族看護学の現状，インターナショナルナーシングレビュー，23 (2)，26-30，2000

杉下知子：ポリオの現状と問題点，小児内科，32 (10)，1640-1645，2000

杉下知子，大脇万起子：病児の発達を促すための援助，小児科，41 (13)，2337-2345，2000

杉下知子：国際学術交流の進め方［１］－国際学術交流を推進する意義，Quality Nursing，7 (1)，95-103，2001

杉下知子，小宮久子：子どもの育成と看護の役割－はじめに，家族看護学研究，5 (2)，112-113，2000

杉下知子，Janjira Wongkhomthong，和田幸子，三原華子，横山梓，湯原なお子，山本則子：タイ国で開催した看護国際交流活動　第1回国際看護セミナー報告，家族看護学研究，5 (1)，45-51，1999

杉下知子：予防接種時の耳式体温計による体温測定，日本医事新報，3969，111-112，2000

杉下知子：日本家族看護学会，家族療法研究，17(2)，187-189，2000

杉下知子：国際学術交流を推進する意義，Quality Nursing，7（1），95-103，2000

Lorraine M. Wright，杉下知子，前原邦江，大脇万起子：特集 家族看護の実践をいかに支えるか－臨床ナースが患者・家族から情報収集をいかに行うか－ロレイン・M・ライト博士に聞く，看護展望，26 (4)，17-24，2001

桑原直己，武藤安子，杉下知子，衛藤隆，城宏輔：日本の子どもは幸せか？－子育ては世代と性を超えたすべての大人の責任－，小児保健研究，59 (6)，639-662，2000

日本看護協会少子社会に関する検討プロジェクト委員会（委員長：杉下知子）：少子社会における看護職の課題と役割－日本看護協会少子社会に関する検討プロジェクト報告より，ナーシングトゥディ，15 (10)，80－82，2000

山本則子，杉下知子：家族介護者への支援のあり方，保健の科学，42 (3)，201-206，2000

山本則子，阿部俊子，稲毛田美香：痴呆性老人のQOL：看護介入を評価する尺度開発の試み，老年精神医学，11，489-495，2000

萱間真美，山本則子，太田喜久子，大川貴子：Grounded Theory Approachを用いた看護研究実践論(1) Research Question，Quality Nursing，5 (6)，459-466，1999

萱間真美，山本則子，太田喜久子，大川貴子：Grounded Theory Approachを用いた看護研究実践論(2) 哲学的前提，Quality Nursing，5 (7)，537-541，1999

太田喜久子，萱間真美，山本則子，大川貴子：Grounded Theory Approachを用いた看護研究実践論(3) 研究デザイン，Quality Nursing，5 (8)，634-639，1999

太田喜久子，萱間真美，山本則子，大川貴子：Grounded Theory Approachを用いた看護研究実践論(4) 研究計画書の作成，Quality Nursing，5 (9)，718-724，1999

山本則子，太田喜久子，萱間真美，大川貴子：Grounded Theory Approach を用いた看護研究実践論(5) データ収集(1)—準備と開始—，Quality Nursing，5(10)，833-836，1999

山本則子，萱間真美，太田喜久子，大川貴子：Grounded Theory Approach を用いた看護研究実践論(6) データ収集(2)—初期の留意点—，Quality Nursing，5(11)，537-541，1999

山本則子，太田喜久子，萱間真美，大川貴子：Grounded Theory Approach を用いた看護研究実践論(7) データ収集(3)—中盤から後期—，Quality Nursing，5(12)，991-995，1999

萱間真美，太田喜久子，山本則子，大川貴子：Grounded Theory Approach を用いた看護研究実践論(8) コーディング(1)—オープンコーディング—，Quality Nursing，6(1)，68-77，2000

萱間真美，太田喜久子，山本則子，大川貴子：Grounded Theory Approach を用いた看護研究実践論(9) コーディング(2)—オープンコーディングと軸足（アクシアル）コーディングの重なり—，Quality Nursing，6(2)，156-167，2000

山本則子，萱間真美，太田喜久子，大川貴子：Grounded Theory Approach を用いた看護研究実践論(10) 分析の実際—オープンコーディングとアクシアルコーディングを中心に(第19回日本看護科学学会交流集会より)ー，Quality Nursing，6(3)，255-263，2000

大川貴子，萱間真美，山本則子，太田喜久子：Grounded Theory Approach を用いた看護研究実践論(11) コーディング(3) コアカテゴリーの生成とストーリーライン，Quality Nursing，6，333-339，2000

大川貴子，萱間真美，山本則子，太田喜久子：Grounded Theory Approach を用いた看護研究実践論(12) 妥当性の確保と結果の記述，Quality Nursing，6，424-433，2000

山本則子，前原邦江，Rashidah Shuib，杉下知子：マレーシアの看護実践・教育活動の視察報告ー第２回　地域クリニックと地域看護婦の活動ー，家族看護学研究，5(2)，146-149，2000

山本則子，前原邦江，Rashidah Shuib，杉下知子：マレーシアの看護実践・教育活動の視察報告ー第３回　マレーシアにおける看護学教育ー，家族看護学研究，6(1)，11-14，2000

法橋尚宏：保健教育へのCAIの応用—学生への教育現場—，保健の科学，42（8），603-608，2000

前原邦江，杉下知子：第５回国際家族看護学会報告ー家族看護が目指すものを改めて考える，看護，52(13)，118-121，2000

前原邦江，山本則子，Rashidah Shuib，杉下知子：マレーシアの看護実践・教育活動の視察報告—第１回地域における母子保健活動について—，5(1)，41-44，1999

三橋邦江，杉下知子：カルガリー大学家族看護学ユニットエクスターンシップ参加報告，家族看護学研究，4(2)，132-135，1999

三橋邦江，杉下知子：平成 10 年「家族看護ワークショップ」開催報告，家族看護学研究，4 (2)，136-139，1999

工藤祐子，杉下知子：在宅中心静脈栄養療法（HPN）の在宅における感染制御，INFECTION CONTROL，9 (2)，179-182，2000

松井典子，杉下知子：国際学術交流の進め方[3]国際学会へ出発するまでの手続き，Quality Nursing，7 (3)，264-268，2001

松井典子，杉下知子：国際学術交流の進め方[2]国際学会への参加，Quality Nursing，7 (2)，172-178，2001

森那美子，人見重美：感染症の予防とリスクマネージメント―針刺し事故時の対応，734-736，1999

著書，編著，教科書ほか

杉下知子：介護職を理解する－よりよい共働をめざして－，日本看護協会出版会，2000

杉下知子，武藤安子ほか：データブック新保育，教育図書，1999

杉下知子編：家族看護学入門，メヂカルフレンド社，2000

杉下知子：予防接種と副作用，p 75／池田勝久，加我君孝，岸本誠司，久保武：耳鼻咽喉科診療プラクティス　3.新生児・幼児・小児の難聴，文光堂，2001

早川浩、杉下知子著：ライフステージと健康，中外医学社，2000

杉下知子，法橋尚宏：ライフサイクルからみた各ステージにおける家族の課題，p28-33／杉下知子編：家族看護学入門，メヂカルフレンド社，2000

杉下知子，法橋尚宏：家族看護とは，p34-37／杉下知子編：家族看護学入門，メヂカルフレンド社，2000

山本則子，杉下知子：家族看護学のための諸理論，p38-56／杉下知子編：家族看護学入門，メヂカルフレンド社，2000

大脇万起子，杉下知子:発達障害児をかかえる家族への看護，p124-134／杉下知子編：家族看護学入門，メヂカルフレンド社，2000

法橋尚宏，杉下知子：病気の子どもの感染予防とケアの質，p163-172／村田恵子編：小児看護学叢書３　病いと共に生きる子どもの看護，メヂカルフレンド社，2000

法橋尚宏：家族看護，p271／幸田正孝，高久史麿，坪井栄孝，三浦文夫総監修：WIBA 2001 年版―保健＋医療＋福祉の現代用語―，日本医療企画，2001

法橋尚宏：看護の質の評価，p276／幸田正孝，高久史麿，坪井栄孝，三浦文夫総監修：WIBA 2001 年版―保健＋医療＋福祉の現代用語―，日本医療企画，2001

前原邦江：母性性と女性性，p 59-66／吉沢豊予子，鈴木幸子編：女性の看護学 母性の健康から女性の健康へ，メジカルフレンド社，2000

研究班会議・報告書など

在宅で介護にあたる家族を支援するためのマニュアル作成事業委員会（委員長：竹中浩治，主任研究者：杉下知子）：在宅で介護にあたる家族を支援するためのマニュアル，社団法人 全国訪問看護事業協会，2000

鎌田ケイ子，五島シズ，雨宮洋子，山本則子，阿部俊子，本田芳香，竹中星郎，石橋典子，沖田裕子，石井鈴子：在宅痴呆高齢者の生活活性化調査研究事業　通所施設の痴呆ケア全国実態調査報告書，財団法人ぼけ予防協会，1999

山本則子：痴呆高齢者家族の介護健康度アセスメントツールの開発，笹川医学医療研究財団「高齢者の医学医療に関する研究助成」平成 11 年度研究報告書，61-68，2000

学会・研究発表

Sugishita C.：A Lecture on the Activities of Japanese Association for Research in Family Nursing, 5th International Family Nursing Conference，2000 年 7 月 19-22 日，Chicago，U.S.A.

Yamamoto-Mitani N.，Sugishita C.，Kawahara N.，Kuniyoshi M.，Hayashi K.，Ishigaki K.：Caregiver Satisfaction Index (CSI): Development of a New Measurement Scale for Japanese Caregivers，5th International Family Nursing Conference，2000 年 7 月 19-22 日，Chicago，U.S.A.

Yamamoto-Mitani N.，Ishigaki K.，Kuniyoshi M.，Kawahara N.，Hayashi K.，Hasegawa K.，Sugishita C.：Positive appraisal of Care, Caregiver Well-Being and Will to Continue Care，The 53rd Annual Meeting of the Gerontological Society of America，2000 年 11 月 20 日，Washington D.C.，U.S.A.

Yamamoto-Mitani N.，Abe T. et al.：Development of a Japanese Quality of Life Instrument for the Elderly with Dementia，The 52nd Annual Meeting of the Gerontological Society of America，1999 年 11 月 22 日，San Francisco，U.S.A.

Hohashi N.：Measurement in Multi-Cultural Research of Families，5th International Family Nursing Conference，2000 年 7 月 20 日，Chicago，U.S.A.

Hohashi N.，Matsumoto K.，Sugishita C.：Nationwide survey of MRSA among home-care patients in Japan，1st International Congress of the Asia Pacific Society of Infection Control，1999 年 8 月 10 日，Hong Kong，China

Mori N.，Hitomi S.，Murakami A.，Sugishita C.，Takamoto S.，Kimura S.：Blanket Use of Nasal Mupirocin Ointment for Decreasing *Methisillin-Resistant Staphylococcus Aureus*（*MRSA*）Isolation in Post-Thoracic Surgical Patients，1st International Congress of the Asia Pacific Society of Infection Control，1999 年 8 月 10 日，Hong Kong，China

Kudo Y., Sugishita C.：A study of central catheter-related infections among HPN patients in Tokyo, APIC 27th Annual Educational Conference and International Meeting, 2000 年 6 月 18-22 日, Minneapolis, U.S.A.

Matsui N., Ju K., Ohmori N., Sugishita C., Kumada M.： A new device for evaluating autonomic nervous activity of cardiovascular system, 37th Rocky Mountain Bioengineering Symposium, 2000 年 4 月 14-16 日, Colorado Springs, U.S.A.

Matsui N., Ju K., Ohmori N., Sugishita C., Kumada M.：Assessment of baroreflex sensitivity using bivariate autoregressive model, The American Physiological Society, 2000 年 8 月 23-27 日, Iowa City, U.S.A.

Matsui N., Ju K., Sugishita C., Kumada M.：Assessment of Baroreceptor Reflex Sensitivity during Passive Leg Cycle Exercise Using Bivariate Autoregressive Model, 3rd International Workshop on Biosignal Interpretation, 1999 年 6 月 12-14 日, Chicago, U.S.A.

Kawada M., Okuzumi K., Mori N., Hitomi S., Sugisita C.：Transmission of *Staphylococcus aureus* between Healthy Nursing Mothers and Their Babies, New paradigm approaches for nursing knowledge development in the 21st century, 2000 年 11 月 9-10 日, College of Nursing Seoul National University, Seoul, Korea

Ohwaki M., Iida Y., Sugishita C.： A Nursing Support Program for the Families of Children with Disorders, 5th International Family Nursing Conference, 2000 年 7 月 19-22 日, Chicago, U.S.A.

Yamashita H., Tsukayama H., Tanno Y., Sugishita C.： Adverse Events of Acupuncture and Moxibustion, University of Exeter Academic Evening, 2000 年 3 月 8 日, Exeter, U.K.

Yamashita H., Tsukayama H., Tanno Y., Sugishita C.: Adverse Events of Acupuncture and Moxibustion, House of Lords Select Committee on Science and Technology, 2000 年, Exeter, U.K.

Yamashita H., Tsukayama H., White A.R., Ernst E., Tanno Y., Sugishita C. ：Systematic Review of Case Reports on Acupuncture Adverse Events in the Japanese Literature, International Congress on Clinical Research and Quality Management in Complementary Medicine, 2000 年 4 月 6-8 日, Munich, Germany

Yamashita H., Tsukayama H., Tanno Y., Sugishita C.：Adverse events of acupuncture and moxibustion, 6th Annual Symposium on Complementary Health Care, 1999 年 12 月 2-4 日, Exeter, U.K.

前原邦江, 杉下知子：出産後の母親の育児生活負担感と家族サポートのアセスメントツールの開発－試作二次元ツールの検討－, 日本家族看護学会第 7 回学術集会, 2000 年 9 月 2-3 日, 三重県鈴鹿市

西岡光世, 小林敬子, 杉下知子：細身体型者のダイエット行動の要因, 第 46 回日本学校保健学会, 1999 年 11 月 27-28 日, 名古屋

大脇万起子，杉下知子：障害児家族に対する就学前後の看護的支援に関する一考察，日本家族看護学会第７回学術集会，2000 年９月 2-3 日，三重県鈴鹿市

大脇万起子，杉下知子：障害児を抱える Personal Identity 獲得への援助，第６回日本家族看護学会，1999 年９月 19 日，浜松

森那美子，人見重美，木村哲：胸部外科手術後患者の MRSA 保菌に対するムピロシン軟膏ブランケットユースの効果の検討，第 48 回日本感染症学会東日本地方会，1999 年 10 月 15 日，東京

森那美子，人見重美，奥住捷子，杉下知子，米山彰子，木村哲：臨床由来メチシリン耐性黄色ブドウ球菌のバンコマイシン感受性に関する検討，第 15 回日本環境感染学会，2000 年２月 18 日，大分

工藤祐子，杉下知子，大塚喜人，高添正和，永井浜江，山田雅子，奥住捷子，米山彰子，矢野久子，木村哲：在宅中心静脈栄養療法（HPN）患者のカテーテル汚染状況に関する調査，日本環境感染学会，1999 年２月 26 - 27 日

工藤祐子，杉下知子，大塚喜人，高添正和，永井浜江，山田雅子，奥住捷子，米山彰子，矢野久子，木村哲：在宅中心静脈栄養法（HPN）患者への退院時およびトラブル発生時の保健指導の内容，日本環境感染学会，1999 年２月 26 - 27 日

工藤祐子，杉下知子：MRSA 隔離病室を有する老人病院の患者、看護職員、環境中のＭＲＳＡの分離状況―薬剤感受性試験を疫学マーカーとして―，第４回日本老年看護学会，1999 年 11 月 13-14 日，長野

松井典子，杉下知子，Kihwan Ju，熊田衛：高齢者における２次元ＡＲ法による圧受容器反射感受性評価法の検討，第 53 回日本自律神経学会，2000 年，東京

松井典子，周起煥，杉下知子，熊田衛：２ＡＲ法を用いた圧受容器反射感受性評価，第 52 回自律神経学会，1999 年 11 月 4-5 日，広島

河田みどり，杉下知子，奥住捷子：産褥期乳腺炎予防に関与する要因の細菌学的分析－健常授乳婦における母乳中細菌の調査から－，第 41 回日本母性衛生学会，2000 年９月 28-29 日，岐阜県岐阜市

松本和史，法橋尚宏，杉下知子：在宅療養者の家族内におけるＭＲＳＡ伝播の検討と訪問看護婦・士からのＭＲＳＡの分離，日本家族看護学会第７回学術集会，2000 年９月 2-3 日，三重県鈴鹿市

湯原なお子，大谷尚子，杉下知子：高校生の学校行事（修学旅行）への適応に関する検討，第 59 回日本公衆衛生学会，2000 年 10 月 18-20 日，群馬県

福田泰子，松井典子，杉下知子：産後１週間以内の母乳中クロム濃度，第41回日本母性衛生学会，2000年9月28-29日，岐阜県岐阜市

杉山智子，石垣和子，杉下知子：嫁介護者における夫の支援に対する認識と嫁介護者の生活満足度および介護生活充実度の関連，日本家族看護学会第７回学術集会，2000年9月2-3日，三重県鈴鹿市

鈴木淳子，稲富恵子，伊藤輝代，杉下知子：感染症看護に関する看護婦の経験と認識について，日本看護研究学会，2000年7月27-28日，千葉県千葉市

熊沢由美子，松岡泉，廣鹿元美，山田花絵，宮本江利子，松井典子，杉下知子：年齢が分娩に関する諸因子に及ぼす影響，第41回日本母性衛生学会，2000年9月28-29日，岐阜県

岡部令子，阿保美樹，齋藤直子，中野千代，奈良朱恵，山崎登美，宮本江利子，松井典子，杉下知子：分娩所要時間に影響を与える因子，第41回日本母性衛生学会，2000年9月28-29日，岐阜県

木戸口桂，中村真紀，角田恵美，井上真樹，千葉紘美，喜多里己，松井典子，杉下知子：一ヶ月健診時の育児不安に関する実態調査，第41回日本母性衛生学会，2000年9月28-29日，岐阜県

三宅美好，野田蓮子，松井典子，杉下知子：全妊婦を対象としたパンフレット配布による妊婦貧血予防の試み，第41回日本母性衛生学会，2000年9月28-29日，岐阜県

人見重美，遠藤博久，森那美子，吉田敦，森澤雄司，木村哲：EpiNet日本版を使用した東大病院における針刺事故の実態調査，第15回日本環境感染学会，2000年2月19日，大分

講演，シンポジウムなど

Sugishita C.：Development of Family Nursing in Japan，The First Korea-Japan Seminar on Nursing Education and Research，1999年9月16日，College of Nursing Seoul National University，Korea

Sugishita C.：Nursing Education and Research at Undergraduate Course in the University of Tokyo，The First Korea-Japan Seminar on Nursing Education and Research, 1999年9月16日, College of Nursing Seoul National University，Korea

杉下知子：〔座長〕第25回日本医学会総会「高齢者介護問題と介護保険」，1999年4月4日，東京

杉下知子：〔司会〕第25回日本医学会総会「子どもの育成と看護の役割」，1999年4月4日，東京

杉下知子：〔パネルディスカッション〕日本チェーンドラッグストア協会設立総会・シンポジウム「高齢化時代におけるドラッグストアの役割」，1999年6月16日，東京

杉下知子：〔パネルディスカッションコーディネーター〕ホームケア研究会　看護・介護シンポジウム「高齢者と痴呆症」，1999年9月4日，東京

杉下知子：〔パネルディスカッション〕ホームケア研究会　看護・介護シンポジウム「高齢者と痴呆症　痴呆症と患者の動向」，1999年9月4日，東京

杉下知子：〔座長〕第6回日本家族看護学会「会長講演―家族を対象とした援助方法の模索（飯田澄美子会長）」，1999年9月18日，浜松

杉下知子：〔座長〕日本家族看護学会第7回学術集会「家族看護学のさらなる発展をめざして」，2000年9月2日，三重県鈴鹿市

杉下知子：〔座長〕第31回日本小児感染症学会「インフルエンザウィルスⅠ」，1999年10月29-30日，福島

杉下知子：〔座長〕第32回日本小児感染症学会　麻疹・風疹2（3），2000年11月25日，東京

杉下知子：〔座長〕第59回日本公衆衛生学会総会「母子保健・学校保健」，2000年10月20日

杉下知子：少子社会の社会的状況―家族を中心にしたケア―，日本看護協会研修会，2000年2月3日，東京

杉下知子：家族システム，エキスパートナース育成 第2回「老人専門看護」，2000年5月31日，東京都板橋区

杉下知子：家族システム看護の実際，国立療養所三重病院講演会，2000年9月1日，三重

杉下知子：在宅で介護にあたる家族を支援するためのマニュアル作成事業，平成 12 年度訪問看護管理者研修会，2000 年 7 月 14 日（東京，熱海），2000 年 9 月 29 日（大阪）

杉下知子：家族支援における家庭看護の役割－家族システム看護を例として，第 3 回日本腎不全看護学会学術集会〔教育講演〕，2000 年，大阪

杉下知子：看護研究研修－データの分析の仕方と研究のまとめ方，東京都立駒込病院看護部院内研修，2000 年 10 月 24 日，東京

杉下知子，他：現代社会における家族看護，日本看護協会看護教育・研究センター研修　平成 12 年度「家族看護」，2000 年 10 月 12 日，東京

杉下知子，他：実習指導案の立て方，平成 12 年度地域実習指導者研修，2000 年 10 月 26 日，東京

杉下知子：在宅で介護にあたる家族を支援するためのマニュアル作成事業，全国訪問看護事業協会 訪問看護管理者研修会，2000 年 7 月 14 日，静岡

杉下知子，法橋尚宏，前原邦江：家族看護学の理論と実践について，東京都立大塚病院エキスパートナース研修会，2001 年 2 月 9 日，東京都豊島区

Yamamoto N.：Elderly with Dementia and Family:Ongoing Research Projcts，The First Korea-Japan Seminar on Nursing Education and Research，1999 年 9 月 16 日，College of Nursing Seoul National University，Korea

山本則子：Service Use for Family Caregivers of the Elderly in Japan，第 4 回ハーバード医科大学―東京大学交流プログラム　医学教育シンポジウム，1999 年 10 月 8 日，東京大学

山本則子：グラウンデッドセオリー法の理論と方法，大分県看護協会研修会，1999 年 8 月 21 日，大分

山本則子：〔座長〕第 6 回日本家族看護学会「高齢者と家族」，1999 年 9 月 18 日，静岡

山本則子：〔パネルディスカッション〕ホームケア研究会　看護･介護シンポジウム「高齢者と痴呆症　患者と家族への支援」，1999 年 9 月 4 日，東京

法橋尚宏：家族の絆　再構築に向けて，日本家族看護学会第 7 回学術集会〔シンポジウム〕，2000 年 9 月 2 日，三重県鈴鹿市

法橋尚宏：すぐに役立つ病院経営実務講座，CareNet TV（SKY PerfecTV！ 772Ch.），1999 年 8 月 2-8 日，8 月 23-29 日，12 月 27-28 日，12 月 30-31 日，2000 年 1 月 1 日，1 月 3-4 日，1 月 6-8 日

法橋尚宏：日常診療における EBM の実践，江戸川区医師会日常診療に役立つメディカルセミナー，2000 年 3 月 21 日，東京都江戸川区

法橋尚宏：第 90 回看護婦（士）国試対策 TECOM バックアップ講座，テコム医学研修協会，2001 年 2 月 10-11 日，東京都新宿区

法橋尚宏：看護婦（士）国家試験対策講座―在宅看護論―，CareNet TV（SKY PerfecTV! 772Ch.），2000 年 1 月 12 日，1 月 26 日，2 月 5 日，2 月 19 日

法橋尚宏：第 89 回看護婦（士）国家試験対策 TECOM バックアップ講座，テコム医学研修協会，2000 年 2 月 12-13 日，東京都新宿区

前原邦江：東京都看護協会東部地区支部 第 9 回看護研究・実践研究会〔コメンテーター〕，2000 年 2 月 19 日，東京都

前原邦江：東京都看護協会東部地区支部 第 10 回看護研究・実践研究会〔コメンテーター〕，2001 年 2 月 17 日，東京都

小林奈美：ケアプランに活かす「痴呆」の知識，文京区介護サービス事業者連絡協議会，2000 年 12 月 20 日，東京

小林奈美：介護概論，社会福祉法人ふきのとう会，2001 年 1 月 29 日，東京

田中英高，梶浦貢，杉山貴之，松井典子，福岡秀興：ベッドレストによる起立直後性低血圧の発症，第二回公開シンポジウム「不動・擬似微小重力環境の生体への影響」，2001 年 3 月 24 日，東京大学

一般雑誌・新聞・その他

杉下知子ほか：日本―タイの看護国際交流活動　タイで開催した「第 1 回国際看護セミナー報告」，週刊医学界新聞，第 2352 号，p3，1999

杉下知子：ポリオワクチンの抗体保存率が低い，すこやかファミリー，第 417 号，p18-19，1999

杉下知子：結核の予防接種，すこやかファミリー季刊クリニックＱ＆Ａ，第 441 号，p26-27，2000

杉下知子：はしかの予防接種，すこやかファミリー季刊クリニックＱ＆Ａ，2000 年夏号，p26-27，2000

杉下知子：ワンポイント感染予防「風疹」，健康のひろば，第 1309 号，p4，1999

杉下知子：「風しんの予防接種」を受けていない人へ，すこやかファミリー6 月号，第 432 号，p10-11，2000.

杉下知子：結核の予防接種，すこやかファミリー季刊クリニックＱ＆Ａ，第 441 号，p26-27，2000.

杉下知子：インフルエンザの予防接種，すこやかファミリー季刊クリニックＱ＆Ａ，2001 年冬号，p26-27，2001

杉下知子：答申「少子社会における看護職の課題と役割」，看護協会ニュース，Vol.397，2 面，2000

杉下知子：日本家族看護学会 2000 年開催学会ＰＲ，ナーシング・トゥデイ，15 (6)，75，2000

杉下知子：予防接種時の耳式体温計による体温測定，日本醫事新報，No.3969，111－112，2000

杉下知子：普及する耳式体温計，9 月 5 日神戸新聞　p 16，8 月 27 日四国新聞　p 13，9 月 17 日鹿児島新聞　p 7，8 月 28 日民報　p 9，2000

杉下知子：21 世紀の健康科学，ホームケア研究会会報，Vol. 3，p 1，2001

杉下知子：学科別進学のためのガイダンス「医学部」，週刊東京大学新聞，第 3147 号，p5，1999

杉下知子：高齢化社会と病気への新しいアプローチ，毎日ライフ，10 月号，146，2000

杉下知子：腎不全看護の質の向上を目指して　第 3 回日本腎不全看護学会開催ー家族システムからみた家族看護，週刊医学界新聞，第 2416 号，1，2000

山本則子，杉下知子：第 5 回国際家族看護学会参加記，週刊医学界新聞，第 2410 号，3，2000

鈴木和子，ロレイン・M・ライト，ジャニス・M・ベル，杉下知子：家族看護学の実践　新たな視点での臨床活用に向けて，週刊医学界新聞，9 面，2000

日本家族看護学会（杉下知子）：家族看護学のさらなる発展をめざして，週刊医学界新聞，2410 号，3 面，2000

法橋尚宏：入院中の子どもに付き添う急迫の家族へのサポート―慢性疾患児家族宿泊施設とマクドナルド・ハウス―，おおさかメディカル，1：平成 12 年 5 月 9 日号，2000

法橋尚宏：はじめてづくしの 2000 年国試を解剖する，看護婦国家試験対策 90 Pre Test―第 1 回解説書―，i-xi，2000

法橋尚宏：医療相談を受け付ける「電脳病院」の胎動，Club Care Net，12：平成 12 年 7 月 1 日号，2000

法橋尚宏：CAIを導入した新しい看護学教育の幕開け—コンピュータを駆使した能動的な疑似体験による教授—，おおさかメディカル，1：平成12年7月9日号，2000

法橋尚宏：小児科病棟における母親の付き添い入院の是非—適否は母親や家族の情況を踏え判断を—，おおさかメディカル，7：平成11年5月10日号，1999

法橋尚宏：激動が予想される2000年の国試に向けて，看護婦国家試験対策89 Pre Test—第1回解説書—，i-x，1999

法橋尚宏：医療相談を受け付ける「電脳病院」の誕生—バーチャルドクターによる客観的なセカンド・オピニオン—，おおさかメディカル，1：平成11年7月9日号，1999

法橋尚宏：どうなる介護保険・ケアマネジメント—超高齢社会に向けての対応施策—，おおさかメディカル，7：平成11年9月9日号，1999

法橋尚宏：速効！国試合格のクスリ，看護婦国家試験対策89 Pre Test—第2回解説書—，i-ix，1999

法橋尚宏：病院の格付けする米版「BEST HOSPITALS」，おおさかメディカル，1：平成11年11月9日号，1999

法橋尚宏：国試キラーになるための最後の切り札，看護婦国家試験対策89 Pre Test—第3回解説書—，i-ix，1999

法橋尚宏：葛尾村マルチメディアビレッジ事業—テレビ電話による遠隔診療，薬の配達，ひとり暮しや高齢者世帯への行き届いたサービス—，おおさかメディカル，1：平成12年1月9日号，2000

法橋尚宏：患者への医療の公平性を保障するEBM--「根拠に基づく医療」が医療の質を改善する—，おおさかメディカル，7：平成12年3月9日号，2000

法橋尚宏：MacPlasmap Proによる遺伝情報解析への招待，医療とコンピュータ，11（4）：36-44，2000

法橋尚宏：EBMのためのPubMed検索指南，医療とコンピュータ，11（5）：79-86，2000

法橋尚宏：患者データベースの構築，医療とコンピュータ，11（8）：41-48，2000

法橋尚宏：PubMedの検索博士になろう（2），月刊Care Net，63：平成13年3月1日号，2001

法橋尚宏：医療事故を防止するための安全管理体制—人間のミスを前提にした方策が急務—，おおさかメディカル，2：平成13年3月9日号，2001

法橋尚宏：適切なエビデンスに基づいた医療とは，Club Care Net，51：平成 12 年 8 月 1 日号，2000

法橋尚宏：EBM の実践に不可欠なオンライン検索術，Club Care Net，51：平成 12 年 9 月 1 日号，2000

法橋尚宏：合格を勝ち取るためのストラテジー，看護婦国家試験対策 90 Pre Test―第 2 回解説書―，i-viii，2000

法橋尚宏：看護におけるアメリカの常識，日本の非常識―質の高い小児看護を実践するために―，おおさかメディカル，1：平成 12 年 9 月 9 日号，2000

法橋尚宏：文献検索におけるピットフォール，月刊 Care Net，57：平成 12 年 10 月 1 日号，2000

法橋尚宏：標準的な治療，予防の情報を提供する「The Cochrane Library」，月刊 Care Net，34：平成 12 年 11 月 1 日号，2000

法橋尚宏：目から鱗の国試ガイダンス，看護婦国家試験対策 90 Pre Test―第 3 回解説書―，i-ix，2000

法橋尚宏：アメリカの管理医療と医療の効率性―医療保険におけるアメリカの常識，日本の非常識―，おおさかメディカル，2：平成 12 年 11 月 9 日号，2000

法橋尚宏：質の高い臨床医学雑誌の要約集「Best Evidence」，月刊 Care Net，62：平成 13 年 1 月 1 日号，2001

法橋尚宏：PubMed の検索博士になろう（1），月刊 Care Net，64：平成 13 年 2 月 1 日号，2001

法橋尚宏：21 世紀の新たな医療コンセプト「補完代替医療」―西洋医療と補完代替医療との融合が急務―，おおさかメディカル，2：平成 13 年 1 月 9 日号，2001

法橋尚宏：ジョンズ・ホプキンス病院の小児看護実践，日本小児看護学会 News Letter，3：平成 13 年 2 月号，2001

2-3. 学内外の公的活動

杉下知子

1971 年　厚生省予防接種研究班班員

1986 年　日本小児保健学会幹事　「小児保健研究」編集委員（現在）

1989 年　日本小児保健学会評議委員・予防接種委員（現在）

1994 年　日本公衆衛生学会誌編集委員（1999 年度まで）

1994 年　日本家族看護学会理事長（現在）

1997 年　東京都母子保健審議会委員（現在）

1997 年　文部省大学設置・学校法人審議会委員（2001 年 3 月）

1998 年　ホームケア研究会会長（現在）

1999 年 4 月 1 日～2000 年 3 月 31 日
　　骨粗鬆症在団調査研究事業検討委員

1999 年 4 月～2000 年 3 月
　　在宅で介護にあたる家族を支援する為のマニュアル作成事業主任研究者

1999 年～2001 年 3 月 31 日
　　文部省看護学・保健学視学委員（高等教育局）

1999 年～2001 年 3 月 31 日
　　文部省短期大学視学委員（高等教育局）

1999 年 7 月 1 日～2000 年 6 月 30 日
　　日本看護協会：少子社会に関する検討プロジェクト委員会委員長

2000 年 6 月～現在
　　日本看護系大学協議会「国立大学医学部における看護教育の問題」委員会委員

2000 年 11 月
　　日本学術会議研究連絡委員会委員（出生・発達障害研究連絡委員会、看護学研究連絡委員会）（平成 15 年 10 月 20 日まで）

2000 年 4 月～2001 年 3 月現在
　　痴呆高齢者の予後追跡調査研究委員長

山本則子

1995 年 8 月～2000 年 3 月	日本看護協会国際活動検討委員会委員
1996 年 12 月～2000 年 3 月	ぼけ予防協会痴呆性老人ケアプラン策定委員
1999 年 4 月～2000 年 3 月	日本看護協会先駆的保健活動交流推進事業研究支援小委員会委員
1995 年 12 月～1999 年 9 月	日本家族看護学会幹事
1999 年 9 月～2000 年 9 月	日本家族看護学会編集委員
1998 年 10 月～1999 年 10 月	Social Science & Medicine Reviewer
2000 年 4 月～2000 年 9 月	厚生省痴呆介護研究・研修センター研修プログラムカリキュラム委員

法橋尚宏

1994年10月～2000年9月	日本家族看護学会幹事
2000年10月～現在	日本家族看護学会評議員
1999年8月～9月	5th International Family Nursing Conference Reviewer
2001年3月	4th International Nursing Reasearch Conference Reviewer

前原邦江

1998年9月～現在	日本家族看護学会幹事

小林奈美

2000年9月～現在	日本家族看護学会幹事
1999年10月～現在	文京区要介護認定審査会審査委員
2000年4月～2001年3月	浴風会痴呆研究・研修センター痴呆高齢者予後追跡調査委員会委員

2-4. 国際交流活動

国際交流活動

第1回国際看護セミナー・看護の視点から見た東南アジアの熱帯医学・エイズ・PHC
主催：President Janjira Wangkhomthong (Christian College, Thailand)
and Professor Chieko Sugishita (The University of Tokyo, Japan)
1999年5月3-8日，Christian College, Nachonpathom, Thailand

韓国カトリック上智大学看護学科教授　東京大学訪問－看護教官との意見交換会－
張国栄 他10名，2000年7月5日，東京大学

The 1st Korea-Japan Seminar on Nursing Education & Research
主催：College of Nursing,Seoul National University
1999年9月15-17日，Seoul National University, Korea

THE 5th INTERNATIONAL Family Nursing Conference in CHICAGO
2000年7月18-25日，Chicago, U.S.A.

第3回家族看護ワークショップ　カルガリー家族看護モデル－実践編－
カルガリー大学看護学部 Lorraine.M.Wright 教授と Janice.M.Bell 准教授を講師として招聘
主催：家族看護研究会　共催：東京大学大学院医学系研究科・医学部家族看護学教室
2000年8月29-31日，東京大学山上会館

東京医学会講演会第 2260 回集会開催
演題：How To Do A 15 Minute (Or Less) Family Interview
演者：Prof.. Lorraine M.Wright , Ph.D,RN
Associate Prof. Janice M.Bell , Ph.D,RN
Family Nursing Unit, Faculty of Nursing, University of Calgary
共催：東京大学大学院医学系研究科・医学部家族看護学教室
2000 年 8 月 31 日，東京大学医学部３号館

平成 12 年度 学術研究奨励資金（国際交流推進経費助成事業）による東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻とソウル大学校看護大学との間における学術交流集会
The 2nd Conference on Nursing Education & Reserch between School of Nursing,Seoul National University and School of Health Sciences & Nursing,The University of Tokyo
杉下知子（責任者），法橋尚宏（実行委員），小林奈美（演者），前原邦江，河田みどり，ペ・スッキ，他（実行委員）
2001 年 2 月 23 日，東京大学医学部３号館

Hohashi N.：Johns Hopkins Hospital，National Library of Medicine，NIH，Massachusetts General Hospital，Harvard University を訪問，1999 年 11 月 3-13 日，Baltimore，Bethesda，Boston，U.S.A.

Hohashi N.：Introduction to Pediatric Nursing，The Institute for Johns Hopkins Nursing を訪問・病棟研修，2000 年 7 月 24 日-8 月 2 日，Baltimore，Maryland，U.S.A.

Maehara K.：International Health Care Seminar，Sharp Health Care を訪問，2000 年 5 月 22-30 日，San Diego，U.S.A.

国際共同研究

Yamamoto-Mitani N.：The use of information technologies for assisting family caregivers of the elderly: International collaborative research (University of California Pacific Rim Grant); 2000/3/1-5, Betty Chang (PI); University of California Los Angeles

Hohashi N., Sugishita C.：Development of the Japanese-language Feetham Family Functioning Survey (FFFS). 1999- ; Suzanne L. Feetham, College of Nursing, University of Illinois

2-5. 海外学術活動援助

平成 11 年度より、大学院生・卒論生の海外学術活動を推進するため、家族看護学教室（杉下奨励金）から当該活動費用の援助を行っている.

平成 11 年度

1) 森那美子（博士 2 年）
発表形態：ポスター発表　援助額：50, 000 円
Mori N., Hitomi S., Murakami A., Sugishita C., Takamoto S., Kimura S.：Blanket Use of Nasal Mupirocin Ointment for Decreasing *Methisillin-Resistant Staphylococcus Aureus* (MRSA) Isolation in Post-Thoracic Surgical Patients, 1st International Congress of the Asia Pacific Society of Infection Control, 1999 年 8 月 10 日, Hong Kong, China

平成 12 年度

1) 工藤祐子（博士 2 年）
発表形態：口演発表　援助額：100,000 円
Kudo Y., Sugishita C.：A study of central catheter-related infections among HPN patients in Tokyo, APIC 27th Annual Educational Conference and International Meeting
2000 年 6 月 18-22 日, Mineeapolis, U.S.A.

2) 河田みどり（博士 1 年）
発表形態：口演発表　援助額：40, 600 円
Kawada M., Okuzumi K., Mori N., Hitomi S., Sugisita C.：Transmission of *Staphylococcus aureus* between Healthy Nursing Mothers and Their Babies,
New paradigm approaches for nursing knowledge development in the 21st century
2000 年 11 月 9-10 日, College of Nursing Seoul National University, Seoul, Korea

３．教室カンファレンス，その他

教室カンファレンス（原則として、毎週火曜日 10:30〜12:00 に実施）

平成 11 年度

1）平成 11 年 4 月 13 日
教授あいさつ，ガイダンス
松井典子（原著抄読）
baroreceptor reflex sensitivity (BRS) 評価法について
2）平成 11 年 4 月 20 日
田中美起（研究発表）
コラーゲン摂取による表皮各層水分含量への影響について
工藤祐子（原著抄読）
Abilities To Turn Suddenly While Waling:Effects of Age, Gender,and Available Response Time
3）平成 11 年 4 月 27 日
森那美子（研究発表）
Blanket use of nasal mupirocin ointment for decreasing methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* (MRSA) isolation in post thoracic surgical patients
日下修一（原著抄読）
The effects of mental health legistlation 1890-1990
4）平成 11 年 5 月 11 日
河田みどり（修論）
継続的な予防的看護介入の効果—乳房外来における継続看護の評価—
5）平成 11 年 5 月 18 日
濱町久美子（研究発表）
不妊治療を受ける夫婦の意志決定プロセスに関する要因についての文献的考察
玉村一郎（原著抄読）
β-Carotene,Carotenoides and the Prevention of Coronary Heart Disease
6）平成 11 年 5 月 25 日
田中美起（原著抄読）
Salutary Effects of Geratine on Nail Defects in Normal Subjects
7）平成 11 年 6 月 1 日
日下修一（修論）
看護史･医療史の比較による看護の独自性、専門性の分析
濱町久美子（原著抄読）
Maternal and Neonatal Outcomes After Prolonged Latent Phase
8）平成 11 年 6 月 8 日
大脇万起子（研究発表）
神経症症状を示す子どもへの Nursing Intervention：看護的遊戯療法 English Approach について

松井典子（学会予演）

Assessment of Baroreceptor Reflex Sensitivity during Passive Leg Cycle Exercise Using Bivariate Autoregressive Model

9) 平成 11 年 6 月 15 日

工藤祐子（研究発表）

MRSA 隔離病室を有する老人病院の患者、看護職員、環境中の MRSA 分離報告―疫学マーカーとして薬剤感受性試験を用いて―

河田みどり（修論）

授乳における乳汁中の細菌学的変化と感染経路の解明 - 乳腺炎発症機序における細菌進入時期の分析 -

10) 平成 11 年 6 月 22 日

玉村一郎（研究発表）

生活習慣病の予防に役立つ健康度の指標を選択し、その妥当性を検討する

森那美子（原著抄読）

The Development of Vancomycin Resistance in a Patient with Methicilin-Resistant Staphylococcus Aureus Infection

11) 平成 11 年 7 月 13 日

西岡光世（研究発表）

若年女子のダイエット行動の要因に関する研究

大脇万起子（原著抄読）

Competence and Adjustment of Siblings of Children With Mental Retardation

12) 平成 11 年 9 月 7 日

大谷尚子（研究発表）

女性のライフサイクルと養護教諭としての成長に関する研究

松井典子（原著抄読）

Interaction of heart-rate fluctuations and respiration in 12 to 14-year-old children during sleeping and waking

13) 平成 11 年 9 月 14 日

大嶺ふじ子（研究発表）

不妊治療を受けた妊産褥婦の不安と対児感情について

田中美起（原著抄読）

Safety of antioxidant vitamins and – β carotene

14) 平成 11 年 9 月 28 日

森那美子（学会報告）

1st International Congress of the Asia Pacific Society of Infection Control (APSIC) 報告

工藤祐子（原著抄読）

Attempts to eradicate methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* colonazition with the use of trimethoprim- sulfamethoxazole,rifampin,and bacitracin

15) 平成 11 年 10 月 5 日

大脇万起子（研究発表）

障害児の発達と運動遊具について

河田みどり（原著抄読）

Mastis:incidence,prevalence and Cost - Results of a twelve-month survey of twelve-month survey of three Sydney Area health services

16) 平成 11 年 10 月 12 日

工藤祐子（研究発表）

MRSA 隔離病室を有する老人病院の患者、看護職員、環境中の MRSA の分離状況 - 薬剤感受性試験を疫学マーカーとして -

日下修一（原著抄読）

The nurses' aid: past and future necessity

17) 平成 11 年 11 月 2 日

前田美穂（卒論）研究計画

小児科病棟における母親の付き添いが家族機能におよぼす影響に関する研究

湯原なお子（卒論）研究計画

宿泊を伴う学校行事における生徒の心の適応と学校生活との関係の調査

18) 平成 11 年 11 月 9 日

工藤祐子（学会予演）

MRSA 隔離病室を有する老人病院の患者、看護職員、環境中の MRSA の分離状況－薬剤感受性試験を疫学マーカーとして－

松井典子（修論）

Evaluation of Baroreflex Sensitivity in the Elderly: Comparison of Bivariate Autoregressive model and Sequence Method Using a New Device（高齢者の圧受容器反射感受性評価－２次元自己回帰モデルとシークエンス法の比較－）

19) 平成 11 年 11 月 16 日

河田みどり（修論）

産褥期乳腺炎発症に関与する要因の細菌学的分析

20) 平成 11 年 11 月 30 日

河原宣子（研究発表）

老人保健事業の充実に向けた事業評価実施の試み－保健婦の視点から－

玉村一郎（原著抄読）

Demographic,Dietary and Lifestyle Factors Differentially Explain Variability in Serum Carotenoids and Fat-Soluble Vitamins: Baseline Results from the Sentinel Site of the Olestra Post-Marking Surveillance Study

21) 平成 12 年 12 月 7 日

前田美穂（卒論）中間報告

小児科病棟における母親の付き添いが家族機能におよぼす影響に関する研究

湯原なお子（卒論）中間報告

宿泊を伴う学校行事における生徒の心の適応と学校生活との関係の調査

22) 平成 12 年 1 月 25 日

河田みどり（修論予演）

産褥期乳腺炎発症に関与する要因の細菌学的分析

松井典子（修論予演）

Evaluation of Baroreflex Sensitivity in the Elderly:Comparison of Bivariate Autoregressive model and Sequence Method Using a New Device（高齢者の圧受容器反射感受性評価－２次元自己回帰モデルとシークエンス法の比較－）

23）平成 12 年 2 月 8 日
前田美穂（卒論予演）
小児病棟における家族の付き添いの実態調査および家族機能に及ぼす影響に関する研究
－FFFS 日本語版 I の開発とそれを用いた家族機能の評価をもとに－
湯原なお子（卒論予演）
修学旅行における高校生の心の適応と日常の学校生活との関係
24）平成 12 年 2 月 22 日
日下修一（修論経過）
看護婦規則の制定の背景と看護の専門性を求める社会情勢・条件を明らかにする
森那美子（原著抄読）
Follow-Up of *Staphylococcus aureus* Nasal Carriage after 8 Years:Redefining the Persistent Carrier State
25）平成 12 年 2 月 29 日
玉村一郎（研究発表）
中高年者における自記式質問表による申告症状と加速度脈波の関連性の調査
工藤祐子（原著抄読）
Surveillance of intranenous catheter-related infections among home care clients

平成 12 年度

1）平成 12 年 4 月 11 日
杉下知子（教授あいさつ，ガイダンス）
森那美子（原著抄読）
(1) Vancomycin-resistant enterococcal infections
(2) Recommendations for preventing the spred of vancomycin resistance Hospital Infection Control Practices Advisory Committee (HICPAC)
(3) Disinfection of hospital rooms contaminated with vancomycin resinstant Enterococcus *faecium*
2）平成 12 年 4 月 18 日
日下修一（修論）
明治・大正期の家庭における看護職の必要性と看護諸団体
河田みどり（原著抄読）
Analysis of DNA Restriction Fragment Length Polymorphism the Evidence for Breast Milk Transmission in *Streptococcus agalactiae* late-Onset Infection
3）平成 12 年 4 月 25 日
工藤祐子（博論）
在宅中心静脈栄養療法（HPN）患者のカテーテル感染発症因子の分析によるカテーテル感染予防チェックリストの開発

松井典子（原著抄読）

(1) Continuous non-invasive blood pressure monitoring:reliability of Finapres device during the Valsalva manoeuvre

(2) Comparison of Finger and Intra-arterial Blood Pressure monitoring at Rest and During Laboratory Testing

(3) Spectral and Sequence Analysis of Finger Blood Pressure Variability. Comparison with analysis of intra-arterial Recording Hypertension

4）平成 12 年 5 月 9 日

森那美子（博論）

MRSA 院内流行株の変遷と①その分子疫学的検討②その生物学的検討

福田泰子（原著抄読）

(1) Unintended Pregnancy Among Adult Women Exposed to Abuse or Household Dysfunction During Their Childhood

(2) Characteristics of Depressed Patients Who Report Childhood Sexual Abuse

5）平成 12 年 5 月 16 日

宮越幸代（原著抄読）

(1) Correlates of child care providers' interpretation of pediatric AIDS:Implications for education and training

(2) Effects of Social Support,Stress,amd Illness on Caregiving of Children with AIDS

(3) Therapeutic Touch with HIV-infected Children

杉山智子（研究発表）

嫁介護者における夫の支援に対する認識と嫁介護者の生活満足度および介護生活充実度の関連

6）平成 12 年 5 月 23 日

福田泰子（研究発表）

産後 1 週間以内の母乳中クロム濃度

日下修一（原著抄読）

Medical Service to Settlers

7）平成 12 年 5 月 30 日

松井典子（学会報告）

The 37th annual Rocky Mountain Bioengineering Symposium

工藤祐子（原著抄読）

Prospective Evaluation of Risk Factors for Bloodstream Infection In Patients Receiving Home Infusion Therapy

8） 平成 12 年 6 月 6 日

田中美起（原著抄読）

Intake of Carotenoids and Retinol in Relation to Risk of Prostate Cancer

法橋尚宏（研修報告）

米国 Johns Hopkins Hospital, MIT, MGH, Harvard University などの視察報告

9）平成 12 年 6 月 13 日

大脇万起子（学会予演）

A Nursing Support Program for Families of Children with Disorders

杉山智子（原著抄読）

Prevention of Falls in the elderly trial (PROFET):a randomized conrtolled trial

10）平成 12 年 6 月 19 日

特別講演：子どもの看護を考える

東邦大学医療短期大学　学長 梶山祥子 先生

11）平成 12 年 7 月 11 日

内藤直子（研究発表）

母親父親が認知している子育てと育児行動の研究

前原邦江（原著抄読）

(1) An Early Labor Assessment Program: A Rondomized,Controlled,Trial

(2) Recognizing the Onset of Labor

12）平成 12 年 9 月 5 日

日下修一（修論）

1850 年以降のイングランドにおける看護婦の家庭への関わりについて

工藤祐子（原著抄読）

Home Parenteral Nutrition: Clinical and Laboratory Analysis of Initial Experience (1994-1997)

13）平成 12 年 9 月 12 日

河田みどり（学会予演）

産褥期乳腺炎予防に関与する要因の細菌学的分析－健常授乳婦における母乳中細菌の調査から－

杉山智子（原著抄読）

Montessori-Based Activities for Long-Term Care Residents with Advanced Dementia: Effects on Engagement and Affect

14）平成 12 年 9 月 19 日

工藤祐子（学会参加報告）

APIC(ASSOCIATION FOR PROFESSIONALS IN INFECTION CONTROL AND EPIDEMIOLOGY) 27th Annual Education Conference and International Meeting

松井典子（原著抄読）

Reduced spontaneous baroreflex response slope during lower body negative pressure after 28 days of head-down bed rest

15）平成 12 年 9 月 26 日

小林奈美（研究発表）

博士論文「都市に居住する要介護高齢者の在宅死の特徴とそれに関連する要因の検討－訪問看護指導対象者の調査から－」の作成過程について

前原邦江（学会参加報告）

The 5th International Family Nursing Conference: Family Nursing for the 21st Century

16）平成 12 年 10 月 3 日

森那美子（博論）

MRSA の院内感染に関する研究（仮題）

17）平成 12 年 10 月 31 日

福田泰子（修論）

新生児の常在細菌叢獲得に関する調査研究

田中美起（報告）

新しい肥満の判定と肥満症の診断基準

18）平成 12 年 11 月 7 日
日下修一（修論）
19 世紀後期以降の日本及び England・Wales の近代家族看護・介護の変遷についての法制度からの検討
19）平成 12 年 11 月 14 日
大脇万起子（研究発表）
学生からみた小児看護実践教育の効果
森那美子（原著抄読）
Community-Acquired Methicillin-Resistant *Staphylococcus aureus* in Hospitalized Adults and Children without Known Risk Factors
20）平成 12 年 11 月 21 日
松井典子（研究発表）
20 日間の模擬微小重力負荷が生体に与える影響
日下修一（原著抄読）
The development of nursing at the General Hospital, Birmingham
21）平成 12 年 11 月 28 日
山下仁（海外情報）
欧米先進諸国における補完代替医学研究の動向
法橋尚宏（研修報告）
ジョンズ・ホプキンス病院の小児病棟の視察研修
22）平成 12 年 12 月 5 日
原田幸一（卒論）
乳幼児アレルギー健康調査とその追跡調査
23）平成 12 年 12 月 12 日
宮越幸代（研究発表）
北タイ地方の父親を亡くした在宅の HIV 感染症児の健康問題の実態と看護介入後の母親によるケア行動の変化
福田泰子（原著抄読）
Transmission of Mother's Microflora to the Newborn at Birth
24）平成 12 年 12 月 19 日
日下修一（修論）
日本とイギリスにおける看護業務に関する諸規則の変遷―「療養上の世話」に焦点を当てた分析―
河田みどり（原著抄読）
Demonstration of mother-to-infant transmission of *Staphylococcus aureus* by pulsed-field gel electrophoresis
25）平成 13 年 2 月 6 日
原田幸一（卒論）
東京都Ａ区における乳幼児アレルギー健康調査の追跡調査―10 年後の有病率と疾病危険因子を中心として―
26）平成 13 年 2 月 13 日
杉山智子（研究発表）
通過施設後のサービス移行における痴呆性老人の行動および家族機能の変化

秋山照男

家族看護学教室の業務について

27）平成13年2月20日

河田みどり（学会報告）

ソウル大学との学術交流会の参加報告

山下　仁（原著抄読）

Trends in Alternative Medicine Use in the United States, 1990-1997－Results of a Follow-Up National Survey

28）平成13年2月27日

特別講演：看護学の教育と実践

北里大学看護学部　学部長　林 滋子 先生

SAS講習会

日時：平成11年6月1日

場所：東京大学医学部附属病院 中央医療情報部 実習室

内容：SAS/INSIGHTの使い方と統計解析の手順について

講師：浜田知久馬（東京大学医学部薬剤疫学教室）

クルズス

1）統計パッケージStatViewの基本

法橋尚宏

平成12年5月23日

2）回帰分析

法橋尚宏

平成12年5月30日

3）「医学中央雑誌」のオンライン検索術

法橋尚宏

平成12年6月13日

4）医学研究と統計学

林邦彦（群馬大学医学部保健学科）

平成12年7月14日

5）Web作成の基本

法橋尚宏

平成12年9月12日

４．教室の沿革 (1999 年 4 月～2001 年 3 月)

1999 年 4 月　杉下教授　学科長に就任する．
常勤スタッフは教授１，講師１，助手２，技術官１の計５名．非常勤講師６名（高橋真理先生，田中哲郎先生，鳥居央子先生，須貝佑一先生，渡辺裕子先生，石井享子先生），大学院博士課程２名（森那美子，工藤祐子），修士課程６名（河田みどり，松井典子，日下修一，平田牧子（休学），松本和史（休学），深堀浩樹（休学）），客員研究員７名（手塚圭子，吉永（山田）亜子，内藤直子，大谷尚子，河原宣子，西岡光世，大嶺ふじ子，山下仁），研究生４名（田中美起，大脇万起子，玉村一郎，浜町久美子），卒論生１名（前田美穂，湯原なお子）．

1999 年 5 月 3-8 日　杉下教授，山本講師　タイ国クリスチャンカレッジ（Dr. Janjira Wongkhomthong）と家族看護学教室の共催による「International Nursing Workshop」（Christian College，Nachonpathom，Thailand）に参加．

1999 年 9 月 16 日　杉下教授，山本講師　平成 12 年度学術研究奨励資金（国際交流推進経費助成事業）による東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻とソウル大学校看護大学との間における学術交流集会「The 1st　Korea-Japan Seminar on Nursing Education & Research」（College of Nursing, Seoul National University）に参加．

2000 年 4 月　講師の山本則子氏が研究休職，UCLA 公衆衛生学部の Visiting Scholar となる．法橋尚宏氏が講師に昇任する．常勤スタッフは教授１，講師１，助手１，技術官１の計４名となる．非常勤講師６名（高橋真理先生，田中哲郎先生，鳥居央子先生，須貝佑一先生，渡辺裕子先生，石井享子先生），大学院博士課程４名（森那美子，工藤祐子，河田みどり，松井典子），大学院修士課程５名（日下修一，杉山智子，福田泰子，松本和史（休学）、深堀浩樹（休学）），客員研究員８名（手塚圭子，吉永（山田）亜子，内藤直子，大谷尚子，河原宣子，西岡光世，大嶺ふじ子，伊藤和子，山下仁），研究生４名（田中美起，大脇万起子，内藤直子，金夏東），卒論生２名（原田幸一，松尾正大）．

2000 年 5 月　事務補佐員として滝沢枝里氏を迎える．

2000 年 6 月 20 日　オープンカンファレンス（特別講演）を開催．講師：東邦大学医療短期大学学長　梶山祥子先生

2000 年 7 月　小林奈美氏を助手として迎える．常勤スタッフは教授１，講師１，助手２，技術官１の計５名となる．

2000 年 8 月 29-31 日　「第３回家族看護ワークショップ カルガリー家族看護モデル－実践編－」（東京大学山上会館にて）を開催．カルガリー大学看護学部 Lorraine.M.Wright 教授と Janice.M.Bell 准教授を講師として招聘．

2000 年 8 月 31 日　東京医学会集会「How To Do a 15 Minutes (or Less) Family Interview」を開催．講師：カルガリー大学看護学部 Lorraine.M.Wright 教授，Janice.M.Bell 准教授

2001 年 2 月 23 日　　平成 12 年度学術研究奨励資金（国際交流推進経費助成事業）による東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻とソウル大学校看護大学との間における学術交流集会（東京大学医学部 3 号館）が開催される.

2001 年 2 月 27 日　　オープンカンファレンス（特別講演）を開催. 講師：北里大学看護学部学部長　林滋子先生

2001 年 3 月 26 日　　平成 12 年度スタッフ会議を開催.

５．資料

卒業論文内容要旨

小児病棟における家族の付き添いの実態調査および家族機能に及ぼす影響に関する研究
－FFFS日本語版Ｉの開発とそれを用いた家族機能の評価をもとに－

指導教官：法橋尚宏
東京大学医学部健康科学・看護学科
平成10年度編入学
前田美穂

小児の入院に家族が付き添うことは，小児の発達を考慮すると大きな意義をもつ反面，残された家族にさまざまな影響を及ぼすことが考えられる．しかし，これまで家族機能を測定する用具が十分に整備されていなかったために，家族の付き添いが家族に与える影響は定量的かつ客観的に議論できなかった．そこで本研究では，1）小児病棟における家族の付き添いの実態を把握し，2）定量的な家族機能の測定用具の開発およびその有効性を検討した上で，3）その測定用具を使用して母親の付き添いが家族に及ぼす影響を評価することを目的とした．本研究は，これらの3部で構成されている．

第Ｉ章

東京都内の小児病棟における家族の付き添いに関する実態調査

1．緒言：小児病棟に入院中の子どもへの家族の付き添いは，母子分離を防ぐという視点と付き添う家族への弊害という視点から賛否両論があり，そのあり方は現在も模索中といえる．本章では，質問票を用いて小児病棟における母親の付き添いに対する病棟方針を把握し，家族の付き添いに関する現状と問題点を明確にすることを目的とした．
2．対象・方法：東京都内の病床数100床以上の病院で診療科に小児科もしくは小児外科をあげている163院の178病棟を対象として，1999年6月に郵送法による自記式質問票調査を実施した．質問内容は，母親の付き添いに対する病棟方針，付き添い率，小児病棟の病床数，家族の付き添いに関する自由記載などとした．
3．結果：73の小児病棟から返却があり，回収率は41.0％であった．母親の付き添いに対する病棟方針では，「原則として許可しないがある条件で許可する」が59.4％で最も多く，「希望により付き添い可」が21.9％，「原則として一律付き添い」と「一律許可しない」と「その他」がそれぞれ6.3％であった．また，付き添い率は0％から100％の範囲にあり，その平均（±標準偏差）は27.1（±29.4）％であった．自由記載では，「母親への負担，きょうだいへの影響を考慮する必要がある，付き添いがいない他の患児への配慮」などの意見がみられた．
4．考察：母親の付き添いに対する病棟方針は，過去の報告と同様の結果であった．「原則として一律付き添い」の方針をとっている病棟では，病床数がその他の病棟方針をとっている病棟よりも有意に少なく（$p<0.05$），混合病棟になっていることが多いことがわかった．また，付き添い率は過去の報告に比べて減少傾向にあった．家族の付き添いに関する自由記載においては，家族の付き添いに対して賛否両論がみられたが，母親や家族への負担を配慮する必要があるという認識が高くなりつつある現状が明らかになった．

第II章

FFFS日本語版Ｉの開発とその有効性の検討

1．緒言：家族看護学分野の研究が進んできたが，家族機能を定量的に測定する用具の開発は十分とはいえない．そこで第II章では，アメリカ合衆国で開発されたFFFS（Feetham Family Functioning Survey）を翻訳し，新しくその日本語版を開発することを目的とした．FFFSは，家族エコロジカルモデルを背景として，「家族と個々の家族構成員との関係」，「家族とサブシステムとの関係」，「家族と社会との関係」の3分野を網羅した27項目で構成される自記式質問票である．25項目はリッカート・スケールで評価し，そこから家族機能の充足度を客観的に評価するd得点などを算出できる．

2．対象・方法：翻訳の正確さと日本語としての自然さに配慮しながらFFFSを翻訳し，バック・トランスレーションをもとに吟味してFFFS日本語版Ⅰを作成した．その後，1999年6～7月に東京都と神奈川県の保育所に子どもを通所させている父母（197家族）を対象とし，配布回収法によりFFFS日本語版Ⅰを用いた調査を2回にわたり実施した．
3．結果：89家族156名から回答が得られ，家族数でみた回収率は45.2%であった．d得点のCronbachのα係数は0.80であり，内的一貫性をもつことが確認できた．再テスト法においては，d得点の相関係数が0.74と有意な相関が認められ（$p<0.01$），反復信頼性が確認できた．さらに，構成概念妥当性の検討では，因子分析により6因子が抽出され，その構成は家族エコロジカルモデルに準拠するものであった．また，保育士に面接し，d得点の内容的妥当性の検証ができた．
4．考察： FFFS日本語版Ⅰの信頼性と妥当性の検討により，FFFS日本語版Ⅰは家族機能測定用具として有効であることが確認できた．FFFS日本語版Ⅰは，対象者の性別，配偶者や子どもの有無を問わず幅広く使用でき，得点化により介入を必要としている分野が明確になり，集団比較および臨床での家族アセスメントへの適用も可能である．アメリカ合衆国では心臓移植を行った子どもがいる家族などでの評価研究に使用されており，今後，我が国においてもさまざまな家族への適用を期待したい．

第Ⅲ章
小児病棟における母親の付き添いが家族機能に及ぼす影響に関する調査 －FFFS日本語版Ⅰを使用した家族機能の評価をもとに－

1．緒言：第Ⅰ章の実態調査では，家に残された家族への配慮が課題のひとつであった．また，過去の研究においても，家に残された同胞の情緒不安などの影響が指摘されている．そこで，第Ⅱ章で開発したFFFS日本語版Ⅰを使用して，母親が付き添いを行っている家族の家族機能を評価し，健常児をもつ母親との家族機能を比較することで，母親の付き添いが家族に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした．
2．対象・方法：東京都内の病床数100床以上の病院で診療科に小児科・小児外科をあげている163院の178病棟のうち，25病棟から調査への参加協力を得た．この病棟に入院している患児に24時間付き添いを行っている家族（父親・母親）を対象とし，配布回収法による調査としてFFFS日本語版Ⅰを1999年9月29日から1999年10月31日に実施した．なお，第Ⅱ章の母親からのデータをコントロール群にするために，子どもの年齢が6ヶ月から6歳未満の患児に付き添いを行っている母親を抽出した．
3．結果：調査期間中に22病棟で210家族が付き添いを行ったが，203家族234名（父親32名，母親202名）から回答があり，家族数でみた回収率は96.7%であった．付き添いを行っている母親のd得点の平均は，「子どもに関する心配事」，「余暇や娯楽の時間」，「日課が邪魔されること」，「体調が悪いとき」の4項目で高かった．また，付き添いを行っている母親のd得点の合計の平均をみると，コントロール群よりも有意に高く（$p<0.05$），とくに「家族とサブシステムとの関係」と「家族と社会との関係」の分野において有意差がみられた（$p<0.05$）．
4．考察：家族機能の得点化により，付き添いを行っている母親は自由時間が少なく，疲労が高い生活の中で，子どもに関する心配事を抱え，心身ともにストレスの高い状態にあることが判明した．また，付き添いを行っている母親は，家族や社会での役割に支障をきたしていると感じており，コントロール群より家族機能の充足度が低い現状が明らかになった．とくに，「家族とサブシステムとの関係」と「家族と社会との関係」の分野における充足度の評価が低く，これはMcCubbinが提唱する家族ストレス・順応・適応の回復モデルにしたがう現象であった．すなわち，家族が子どもの入院という危機状態に，身内や地域社会との関係を含めて対処する能力を獲得していく段階であると説明できる．これらのことから，母親が付き添いを行っている家族の家族機能を家族と社会との相互関係から正確にアセスメントし，良好な家族機能を維持できるように働きかけることを家族看護における課題として提案したい．

なお，第Ⅰ章と第Ⅱ章は，報告と原著論文として「家族看護学研究」（日本家族看護学会）に投稿済みである．

卒業論文内容要旨

論文題目：修学旅行における高校生の心の適応と日常の学校生活との関係

指導教官　杉下 知子 教授
東京大学医学部健康科学・看護学科
平成 10 年度進学
氏名　湯原 なお子

はじめに

今日、中高生によるいじめ•性の逸脱行為•不登校•心身症•問題行動などが増加傾向にあり、心理的要因の関与する心の問題として取り上げられている。特に高校生でこれらの問題は、中途退学者の増加とともに、学校という彼らが生活の大半の時間を過ごす場への不適応の結果であり、その氷山の一角が顕在化したものであると考えられて、学校教育において重要かつ緊急の課題となっている。また、保健室に来室する、心理的要因の関与が疑われる心身症的な症状を示す生徒は、ほとんどの高等学校でみられ、増加傾向にあることから、現代の日々の高校生活を送っている高校生の中に、問題行動の予備軍として学校生活への不適応状態にある生徒が存在することは容易に想像できる。

学校生活を構成している授業や課外活動や学校行事などにおける心の適応状態は相互に関係を持ち、学校生活全体への心の適応に結びついていると考えられるが、特に修学旅行などの宿泊を伴う学校行事では、日常の学校生活よりも他人と生活をともにする時間が長いことより、不適応状態が現れやすいと考えられる。

本研究では、心の問題の心理的要因への対応を考える際に、適応について把握することが必要であると考え、楽しく感じられることは心身の健康状態が良好に保たれていることであり、それを適応状態にあると判断し、適応とは「楽しい」と感じているかという捉え方をして、学校生活における心の適応について、日常の学校生活の過ごし方との関係から検討することと、特に修学旅行という宿泊を伴う学校行事における心の適応について、学校生活における心の適応や、修学旅行に対する心境などとの関係から検討することを目的とした。

方法

都内国立大学附属高等学校の平成 12 年 11 月に修学旅行に参加した、高校 2 年生 345 名(男子 182 名、女子 163 名)を対象に、修学旅行を間にして前後 2 回、学級担任の協力を得てホームルームの時間に、自記式質問紙調査を行った。修学旅行前の調査は 10 日前に実施され、回収率は 90.4%であり、修学旅行後の調査は翌日に実施され、回収率は 84.6%であった。そのうち修学旅行の前•後ともに回収でき、両者が同一人物であると確認できるものを有効回答とし、有効回答数は 274(79.4%)、そのうち男子 146(80.2%)、女子 128(78.5%)であった。

調査票は、この分野の先行研究が検索し得なかったことから著者が独自に作成し、旅行前には生徒の学生生活の過ごし方（学校生活全体への感情／学校生活の中心になっているもの／成績についての認識／恋愛関係／友人関係／課外活動への参加態度／保健室利用）と修学旅行に行く前の心境について（修学旅行全体への感情／その準備の段階での様子／修学旅行の具体的な内容や最近の体調に対する心境(期待•不安)とその表出／旅行自体の自分の中での位置づけ）の項目から、旅行後には修学旅行から帰ってきた後の心境（修学旅行全体の感想／修学旅行の具体的な内容に対する心境とその表出／旅行前の心境／旅行自体の自分の中での位置づけ）についての項目から構成した。

分析には、高校生の学校生活の過ごし方や修学旅行に対する心境について把握した後、主に χ 二乗検定を用いて、①学校生活における心の適応と学校生活の過ごし方との関係、②修学旅行における心の適応と、学校生活の過ごし方についての項目や修学旅行前後の心境についての項目との関係を検討した。さらに、③修学旅行中について、旅行中に修学旅行全体に

対する心境の変化が生じたかどうかで「変化があった」群と「変化がなかった群」の二つに分け、また、旅行中に心境が「楽しみではなかったが、楽しめた」という「プラス」に変化した群と、「楽しみであったが、楽しめなかった」という「マイナス」に変化した群の二つに分けて集計し、それぞれ学校生活の過ごし方についての項目や修学旅行前後の心境についての項目との関係を検討した。以上の解析には、SASを用いた。

結果

①学校生活に適応しているのは、274人中102人(37.2%)であった。また、学校生活は学業よりもむしろ部活動や友達との生活に重点がおかれ、それらやクラス活動を通して、相談できる友人関係の確立が見られた。学校生活における心の適応の要素に、部活動とクラス活動への参加態度と相談できる友人の有無があげられた($P<0.01$)。

②修学旅行を「楽しみ」と感じているのは、274人中136人(49.6%)であった。旅行前に「楽しみ」と感じているかと、学校生活の過ごし方と修学旅行前の心境との間では、旅行について楽しみなことの有無とその表出と旅行前一ヶ月の体調と学校生活への心の適応と部活動と相談できる友人の有無に有意な関係が見られた($P<0.01$)。

修学旅行が「楽しかった」と感じたのは、274人中191人(69.7%)であった。修学旅行を「楽しかった」と感じたかと、学校生活の過ごし方と修学旅行前後の心境との間では、旅行が楽しみであるかと旅行について楽しみなことの有無とその表出と楽しかったことの有無とその表出と楽しみであったことを楽しめたかと相談できる友人の有無に有意な関係が見られた($P<0.01$)。

以上より、修学旅行への心の適応の要素に、修学旅行に関する楽しみなことの有無と、それについての話も含めて相談できる友達の有無があげられた。

③修学旅行に対する心境が変化したのは274人中107人(39.1%)であった。変化の有無と、学校生活の過ごし方と修学旅行前後の心境との間では、修学旅行前の心配なことの有無に有意な関係が見られた($P<0.01$)。

そのうち心境がプラスに変化したのは107人中81人(75.7%)であった。変化の様子と、学校生活の過ごし方と修学旅行前後の心境との間では、心配なことが実際にどうであったかと学校生活における心の適応に有意な関係が見られた。($P<0.01$)

考察

現代の高校生の学校生活における心の適応の要素としてあがった、クラス活動への参加態度と部活動と相談できる友人の有無という3つの要素間には、有意な関係が見られなかった。しかし、それぞれの要素に深く注目することで、その要素同志につながりがあることが推測され、学校生活においてこれらの要素で適応状態を把握することの重要性がいえただろう。この結果は逆に考えると、あるひとつの要素において危機的状況に陥った場合に、一気に学校生活不適応を引きおこす危険性も持っていると考えられる。そして、適応を高めるためには、生徒が自発的に部活動やクラス活動などの種々の活動に参加できるような、学校側の関わり方や環境作りが必要であると考えられる。

修学旅行への心の適応の要素は、修学旅行自体の構成に関することも含まれていたが、心の適応の要素も含めて日常の学校生活と深く関係していた。よって、思春期という自己の変化に富む時期にある高校生にとって、修学旅行などのような特に不適応状態を導きやすいと考えられる、非日常の環境におかれたときに大切になってくるのは、日常の生活であると推測された。また、理由を答える問に対して、全体を通して「何となく」「特に理由はない」「特別な感情はない」といった、具体的ではない回答が多く見られ、修学旅行などの非日常の環境では、日常では見えてこない学校不適応の要素が現れてくる可能性も考えられる。そして、適応を高めるためには、生徒が関心を持てるような行事の組み立てに加え、日常生活への対応が必要であると考えられる。

産褥期乳腺炎発症に関与する要因の細菌学的分析
Bacteriological Analysis of the Factors Related to Puerperal Mastitis

86023　河田　みどり
midori kawada
指導教官：杉下　知子　教授
Tutor : Prof.　C．Sugishita
健康科学・看護学専攻平成 10 年 4 月入学
Admission to Division of Health and Nursing Sciences in April, 1998

緒言

産褥期乳腺炎は母体に発熱・乳房の疼痛を与え、母乳哺育を妨げる乳房障害である。しかし乳房ケアや保健指導によって、予防可能な疾患である。乳汁うっ滞が重要な発症要因であり、うっ滞した乳腺内で主な起炎菌である *Staphylococcus aureus* が増殖し、感染を起こすとされている。本症発症後の母乳中には、*S. aureus* を含む一般細菌が増加すると報告されている。しかし乳汁うっ滞と母乳中細菌数との関係・採取による母乳中への細菌の排出状況・健常な母児間での *S. aureus* の伝播の状態は明らかにされていない。よって本研究は 1.母乳の連続採取による *S. aureus* を含む一般細菌の母乳中への排出状況、2.母乳中一般細菌数と乳房の状態（前回授乳から採取までの時間・母乳採取量・乳房の硬結の有無）・属性との関係、3. *S. aureus* を指標とした健常な母児間における微生物の伝播の状態、を明らかにし乳腺炎予防のための方策を導くことを目的とした。

方法

1．対象・材料

(1)T 大学医学部附属病院乳房外来診察室を調査場所とした。T 病院で分娩し、平成 11 年 8 月 24 日から 10 月 15 にかけて、乳房外来を訪れた母乳哺育をしている分娩後 4 ヶ月までの健常な母親とその乳児で、同意の得られた者を対象とした。

(2)母乳・母親の乳輪部・児の鼻腔および口腔から検体を採取した。

(3)母乳は乳輪部を清拭後、滅菌手袋を装着し、用手的に 1 分ごとの分画採取を 10 分間連続して行った。すなわち母乳の検体は対象者 1 例につき、計 10 検体採取した。採取乳はただちにクーラーボックス内で氷冷し、採取重量を測定した。母親の乳輪部・児の鼻腔および口腔の検体は、スワブ法により各 1 回採取した。

2．方法

氷冷した母乳を撹拌後、1/15M リン酸緩衝液(pH7.2)を加え 1/5 希釈乳を作った。1/5 希釈乳 100 μl を羊血液寒天培地・食塩卵培地にそれぞれ接種し、コンラージ棒で塗り広げ、37℃下にて 1 昼夜好気性に定量培養した。母親の乳輪部・児の鼻腔および口腔のスワブ付着菌は、羊血液寒天培地と食塩卵培地にそれぞれ接種し、37℃下にて 1 昼夜好気性に培養した。培養後、羊血液寒天培地に発育したコロニーを計数し、一般細菌数とした。*S. aureus* は、食塩卵培地上にレシトビテリン反応を呈したコロニーを計数し、*S. aureus* の細菌数とした。

羊血液寒天培地・食塩卵培地に発育したコロニーの形状を観察し、形状が異なるコロニーを釣菌し羊血液寒天培地に画線塗抹し、35℃、5%CO_2 下にて 24 時間分離培養した。分離培養後コロ

ニーの形状を観察し、観察後コロニーを釣菌し羊血液寒天培地に画線塗抹し 35℃、5%CO_2下にて 24 時間純培養した。純培養後、グラム染色（ハッカーの変法）・顕微鏡検査・溶血環の観察・カタラーゼ試験・コアグラ-ゼ試験・チトクロームオキシターゼ試験・オプトヒン試験・VITEK GPI および GNI カードにより同定した。母乳・児の鼻腔もしくは口腔から分離した *S. aureus* について、MIC 測定用プレートを用いて 12 種類の薬剤について、NCCLS の検査法に従い液体培地希釈法により最少発育阻止濃度を測定した。母児ともに検体採取できた症例のうち、母乳もしくは母親の乳輪部と児の鼻腔もしくは口腔から検出した *S. aureus* について、パルスフィールド電気泳動法による遺伝子解析を行い、母児間での伝播の状態を調べた。

結果

1．採取乳中の *S. aureus* を含む一般細菌の総細菌数の排出状況は、図.1 に示すとうり症例によって異なっていた。5 分以降に排出が多くなる 3 例中 2 例に乳房の硬結があった。

2．母親 11 例（平均 31.73 歳，SD＝4.07）とその乳児 8 例（男児 2 例，女児 6 例）から検体を採取した。母乳中一般細菌数 CFU/ml と前回授乳から母乳採取までの時間の間には、有意な正の相関があった（$rs=0.64$，$p<0.05$）。母乳採取量との間には、採取量が多くなると一般細菌数 CFU/ml が少なくなる傾向があった（$rs=-0.56$，$p<0.1$）。乳房に硬結のある群 4 例と無い群 7 例の間には、母乳中一般細菌数 CFU/ml に差はなかった（$z=0.18$，$p>0.1$）。就業者は 11 例中 4 例であった。この 4 例中勤務している者は 2 例であり、2 例とも前回授乳から母乳採取までの時間が 400 分・450 分と他の 9 例に比べ長かった。また初産婦 5 例と経産婦 6 例の間には、母乳中一般細菌数 CFU/ml に差はなかった（$z=-0.18$，$p>0.1$）。また分娩後日数との間には、有意な相関はなかった（$rs=0.49$，$p>0.1$）。母乳中に *S. aureus* を検出した者は 11 例中 6 例であった。この 6 例中 4 例が就業者だった。*S. aureus* 陽性群 6 例と陰性群 5 例を比較すると、前者が有意に母乳採取量が少なかった（$z=2.09$，$p<0.05$）。就業者のほうが母乳中に *S. aureus* を検出する傾向があった（$p=0.061$）。初産婦と経産婦では、経産婦に同様の傾向を認めた（$p=0.08$）。

3．健常な母児間における微生物の伝播の状態を明らかにするため、8 組の母児のうち母乳中もしくは母親の乳輪部と児の鼻腔もしくは口腔内に *S. aureus* を検出した 4 組の母児について、パルスフィールド電気泳動法による遺伝子解析を行った。4 組すべてにおいて、それぞれの母児間で遺伝子型が同一であった。

考察

乳房に緊満があり搾乳する場合、母乳分泌過多を防ぐために搾乳に要する時間を長くしないよう指導をする。連続採取乳中総細菌数 CFU の排出状況は個人によって異なることから、一回の搾乳に要する時間の長短だけでなく、乳房の硬結の有無・母乳分泌状態を考慮する必要があると考える。母乳中一般細菌数 CFU/ml は、乳腺内の滞留時間に比例して多くなっていたため、乳腺炎予防のためには、授乳／搾乳間隔を延長しないことが重要と考えられた。採取時点で勤務していた者が前回授乳から母乳採取までの時間が長いことから、今後症例数を増やし勤務している者について検討を要する。健常な母児間において、微生物の行き来があると言われているが、*S. aureus* を指標とした本研究によりこの現象が実証された。今後は乳腺炎発症に関与する母児における *S. aureus* の保菌状態、*S. ureus* のビルレンス、母体免疫との関係を明らかにすることが課題である。

図.1 母乳中一般細菌数CFUの10分間の累積百分率

Evaluation of Baroreflex Sensitivity in the Elderly: Comparison of Bivariate Autoregressive model and Sequence Method Using a New Device

高齢者の圧受容器反射感受性評価

-2次元自己回帰モデルとシークエンス法の比較-

86025 Noriko Matsui

松井　典子

Tutor: Prof. C. Sugishita

指導教官:杉下　知子　教授

Admission to Division of Health and

Nursing Sciences in April, 1997

健康科学・看護学専攻平成9年4月入学

Introduction

Baroreflex sensitivity (BRS) is frequently evaluated for patients with cardiovascular disorders. However the method to estimate BRS has not been established yet, especially for the elderly, and the conventional tonometry system is very complex in calibration. The purposes of this study are to evaluate 1) a new calculation method (bivariate autoregressive (2AR) model) and 2) a new measurement device to estimate BRS.

Methods

Study 1: Evaluation of a new calculation method (2AR) for BRS

Nine healthy females (22.2±0.34 yrs.) performed passive and dynamic leg cycle exercise (PLE and DLE, respectively) for 6-min (exercise stage) after 6-min rest (rest stage) in supine position. During each stage, continuous arterial blood pressure (AP) was measured to obtain pulse interval (PI) and systolic arterial blood pressure (SBP) variability (PIV and SPV, respectively). BRS was estimated using 2AR model based on Levinson-Darvin method and conventional sequence method in order to evaluate the applicability of 2AR model.

Study 2: Evaluating a new measurement device

Continuous AP and finger blood pressure signal (FPS), both used to obtain PIV and SPV, were measured simultaneously by conventional tonometry system and by a new device, respectively. The data were taken for 6-min after 15-min rest using 12 elderly subjects (85-95 yrs.). Autoregressive (AR) model was used to estimate spectral power in two frequency bands: the low and high frequency bands (LF: 0.04-0.15 Hz, HF: 0.15-0.40Hz). LF and HF of PIV and LF of SPV reflect autonomic nervous activity of cardiovascular system. 2AR model was used to estimate BRS.

Results

Study 1: The correlation between two BRS values estimated by sequence method and 2AR model was r=0.96 during rest stage (mean±SE: 27.56±5.03 vs. 10.45±1.52 msec/mmHg, respectively). BRS during PLE and DLE stages could not be estimated with conventional sequence method in 2 subjects, while BRS in all stages could be estimated with 2AR model.

Study 2: Correlation between the PI values derived from the conventional tonometry system and the new device were superimposable (r=0'.99; mean±SE: 866.24±25.40 vs. 866.15±25.38 msec., respectively), while correlation between SBP values equaled only 0.33. The correlation of LF and HF of PIV from the two devices were also highly correlated (both r=0.99). However, after normalized by standard deviation, only LF of SPV was significantly correlated (r=0.74). BRS from two devices were not correlated (r=-0.19).

Discussion

The result in study 1 suggests that 2AR method is better than conventional sequence method to measure continuous AP especially when the subjects are in motion. In study 2 the new device performed well with regard to PI and spectral analysis of PIV and SPV, and it is because fluctuation of FPS reflects that of SBP. However, BRS could not be estimated using the new device; FPS from the new device may not reflect the actual value of SBP. The estimation of BPS will become possible when the device is improved to reflect the SBP value.

卒業論文内容要旨

東京都A区における乳幼児アレルギー健康診査の追跡調査
―10年後の有病率と疾病危険因子を中心として―

指導教官：法橋尚宏
東京大学医学部健康科学・看護学科
平成11年度入学
原田幸一

1．緒言

アレルギー疾患は年々増加傾向にある．文明が発達し，人間にとって住み良い環境となるにつれて増加していることからアレルギー疾患は文明病とも呼ばれている．また，非都市部に比べて都市部でその有病率が高いのが特徴である．増加の要因は様々であるが，そのほとんどが生活様式の変化によるものである．生活様式が変化するにつれアレルゲンも多様化し，近い将来，何に曝露されてもアレルギー様症状を呈する可能性が指摘されている．

そこで，本研究では，平成6年度に実施された東京都A区乳幼児アレルギー健康診査の追跡調査を行うことで，都内有数の過密都市であるA区のアレルギー疾患有病率の現状または変化を把握し，さらに，疾病危険因子を検討することを目的とした．

2．対象と方法

東京都A区に在住し，昭和63年12月から平成元年11月までに生れ，A区保健所内の4ヶ月児健康診査を受診した1,212名に対して調査を行った．先行調査として実施済の平成6年度は転出者270名を除く942名のうち309名の有効回答が得られた(回収率は32.8%)．平成12年度も平成6年度に対象となった942名を対象とした．平成6年度に行われた東京都A区乳幼児アレルギー健康診査と同じ質問紙調査を10月に郵送法による自記式質問紙調査として再調査した．今回，対象者の年齢が学童となっていることを考慮し，日常生活について塾，勉強時間などについての設問を追加した．

3．結果と考察

対象者942名のうち，転出者335名を除くと607名であり，そのうち有効回答が279名得られた(回収率は46.0%)．質問紙から算出した各疾患の有病率を表1に示した．

平成6年度に比べて平成12年度の方が有病率が有意に上がった疾患は，アレルギー性鼻炎とアレルギー性結膜炎で，有意に下がった疾患はアトピー性皮膚炎と気管支喘息で，その他の胃腸アレルギーと急性蕁麻疹は有意な差はみられなかった．アトピー性皮膚炎と気管支喘息は，一般的に成長するにつれて軽快し，アレルギー性鼻炎やアレルギー性結膜炎は増加する傾向にあるが，本研究でも同じ結果となった．厚生省が1992～1996年に行った「アレルギー疾患の

疫学に関する研究」という全国調査によると,全国平均よりもA区の方が有病率の高い疾患は,アトピー性皮膚炎,アレルギー性鼻炎で,低い疾患はなく,その他の疾患では差はみられなかった.また,東京都衛生局による「アレルギー疾患に関する全都調査」によると,東京都全体の有病率と比べてA区の方が有病率の高い疾患は,アトピー性皮膚炎,気管支喘息,アレルギー性鼻炎で,低い疾患は急性蕁麻疹,その他は差がなかった.アレルギー疾患全体としては,全国平均と東京都平均のどちらよりも,A区は有病率が高かった.A区の有病率が高い理由としては,都市化の進展に伴う生活環境の変化が大きく影響していると考えられる.

またアレルギー疾患の危険因子として考えられるのは,「運動量の減少」のみであった.他に「喫煙」,「掃除の頻度」,「寝具への配慮」など危険因子と考えることのできる項目はあったが,統計的に意味のある値は得られなかった.ただし,「掃除頻度」は年次的に減り,「寝具への配慮」では疾患を持っていながら「何もしない」ものの割合が6割強となっており,「布団の手入れ」に関しても,「ほとんどしない」ものの割合が有意に増えていた.このように,生活習慣の改善に向けた一層の努力が必要な例もあり,今後,東京都や行政における大々的な予防事業の充実が必要であるといえる.

また,家族歴を調べることにより,アレルギー疾患の家族集積性が認められた.これは,各アレルギー疾患がアトピー反応として遺伝的に同じ背景を持っていることによる,また,今回アトピー性皮膚炎と気管支喘息とアレルギー性鼻炎の 3 疾患に関しての併発性は認められなかった.アレルギー性鼻炎とアレルギー性結膜炎の併発性も認められなかったが,併発率は年次的に上がる傾向がみられた.併発性の低さに関しては馬場氏により提唱されたアレルギーマーチという考え方で明らかにできる.アレルギーマーチとは,「アトピー素因を持つ個体が,皮膚症状や呼吸症状がある一定の関係を持って交替しながら発症してくること」である.

今回の追跡調査により,東京都A区における11～12歳の学童の49.4%が何らかのアレルギー疾患を持っていることが明らかとなり,アレルギー対策の重要性・緊急性が改めて示された.

[表1] 各疾患有病率比較

	平成6年(5～6歳)	平成12年(11～12歳)	P値
アトピー性皮膚炎	84/309(27.2%)	54/279(19.4%)	0.025*
気管支喘息	49/309(15.9%)	32/279(11.5%)	0.12
アレルギー性鼻炎	44/309(14.2%)	93/279(33.3%)	0.0001**
アレルギー性結膜炎	16/309(5.2%)	38/279(13.6%)	0.0004**
胃腸アレルギー	4/309(1.3%)	3/279(1.1%)	0.81
急性蕁麻疹	15/309(4.9%)	11/279(3.9%)	0.59
何らかのアレルギー疾患	137/309(44.3%)	138/279(49.4%)	0.21

カイ2乗検定によってP値を算出した.

P<0.01の場合は**, P<0.05の場合は*を付した.

日本と英国イングランドにおける近現代看護の変遷と文献的検討
－看護制度の法的特徴，在宅看護における看護の自律性について－
Modern nursing vicissitude and record analysis in Japan and England
－Legal aspects of nursing system and nursing autonomy of visiting nursing－

96026　日下　修一
Shuichi Kusaka
指導教官：　杉下　知子　教授
Tutor : Prof. C. Sugishita
健康科学・看護学専攻平成 11 年 4 月入学
Admission to School of Health Sciences
and Nursing in April, 1999

緒言

Nightingale, F.に始まる近代看護が一般化するのは,日本では日清戦争,日露戦争後である.当時の病院看護婦,派出看護婦の活動についての研究はあるが,当初行われてきたナイチンゲール方式の看護教育が日本では途絶したこと,戦後の日本の看護教育が米国の影響を強く受けたことにより,英国と日本の関係についての看護史研究は少ない.近代看護の変遷を日本と米国を比較検討した研究は多いが,島国という地理的条件及び国民性,医療福祉制度の類似性という点で,日本は米国よりも英国と比較検討すべき点が多いと思われる.また,在宅での看護という点で,19世紀後半から20世紀前半に行われていた日英の派出看護婦会,private nurse, district nurse といった在宅看護は,今日の日本の訪問看護のあり方に寄与する部分が存在すると思われる.

本研究は19世紀後半から現在に至る日本と英国イングランドの看護及び在宅介護に関連する法規を医療統計,医療政策等と共に検討することにより,両国の看護婦制度と養成についての法的特徴を明らかにし,在宅看護の観点から派出看護婦と訪問看護婦の差異,在宅看護と在宅介護における看護の自律性（他職種への依存性の低さと定義）について検討するものである.

方法

日本では東京大学総合図書館書庫,東京大学医学部附属図書館,東京大学法学部近代日本法制史料センター（明治新聞雑誌文庫）,東京大学社会情報研究所,国立公文書館,東京都公文書館所蔵の文献,英国では対象をイングランドに限定し,The British Library, Royal College of Nursing Library, Welcome Trust History of Medicine Library 各図書館所蔵の文献を対象とした.そして,法律条文に基づく看護婦（以下原則として看護士,准看護婦・士を含む）の資格制度の変遷及び在宅看護の変遷,各文献に含まれる病院統計及び人口統計に基づく看護婦数の変動について検討した.

結果

1．看護規則と看護の変遷

近代看護婦（一定の訓練を受けた看護婦）は日本では 1887 年,イングランドでは 1862 年に誕生した.ただし,イングランドでは 1861 年に既に看護婦は職業として一般化していた.日本における看護婦の資格制度は全国的には 1915 年の内務省看護婦規則に始まった.イングランドでは 1919 年の Nurses Registration Act に始まった.日本では看護婦派遣,在宅看護の提供は 1888 年から 1948 年まで派出看護婦活動として存在し,1948 年以降職業安定法により制限を受け,1991 年以降は法的に認められた訪問看護ステーションが実施してる.一方,イングランドでは近代看護婦誕生以前から存在し,法的には 1943 年以降現在に至るまで看護婦派遣業 Nurses Agency が存続している.家庭への看護婦派遣はイングランドでは現在まで民間事業または公的事業として行われてきた.就業看護婦数（日本は看護士,准看護婦,准看護士を含み,イングランドは無資格者も含む）は 1921 年に日本 36,322 人,イングランド 94,381 人とイングランドが日本を上回り,1971 年に日本 290,733 人,イングランド 304,927 人でほぼ同数となり,1991 年に日本 745,301人,イングランド 383,351 人と日本が大きく上回った.病床数は 1921 年日本 39,740 床,イ

ングランド 228,556 床,1971 年で日本 782,051 床,イングランド 425,982 床,1991 年日本 1,957,614 床,イングランド約 243,000 床であった.看護婦 1 人当たりの病床数は,イングランドは 1949 年に 3.5 床で,それ以降低下し,1992 年には 0.6 床となり,日本と比べれば 1970 年代以降 3 倍以上の開きがあった.

２．看護業務の法的比較

日本では,1915 年の内務省看護婦規則及び 1948 年の保健婦助産婦看護婦法で業務独占は一貫して規定されていた.イングランドでは,1919 年に Nurses Registration Act が施行され,制服やバッジ等を定め,名称独占を規定した.名称独占は 1979 年に Nurses, Midwives and Health Visitors Act に統合されても不変である.資格レベルの維持については日本が容易であり,職域の拡大性はイギリスが高く,他職種との関係は日本が明確であった.

名称独占を行っているイングランドでは無資格看護婦が多数存在し,その割合は 1959 年に 56.7%であり,1977 年の 48.5%を除き,1982 年の 50.5%まで無資格看護婦が過半数であったが,その後減少し 1994 年には 36.1%となった.

３．在宅看護に対する日本の過去と現在の比較,イングランドの在宅看護の変遷

1948 年までの派出看護婦会と 1991 年からの訪問看護ステーションの事業の特徴を比較すると,派出看護婦会の活動時に施行されていた看護婦規則から,医師への依存性が低く,在宅での自律性の高い看護を行えたことが分かった.訪問看護婦は管理者が看護職であり,看護の自律性は十分高いが,訪問看護活動は医師,介護福祉士等他職種との連携の上行われるため,派出看護婦に比べ自律性が低い部分がある.業務時間は派出看護婦会の方が長時間であり,訪問看護婦は短時間であった.

NHS(National Health Service)のデータによれば,イングランドの医療福祉関係就業者の構成は病院看護スタッフ,地域看護スタッフ,社会福祉スタッフであり,1967 年以降の割合は病院の看護スタッフ約 70%,地域看護スタッフ約 5%,ソーシャルケアスタッフ約 25%であった.

考察

１．看護規則と看護の変遷

訪問看護ステーションによる在宅看護事業への看護婦の参加を前提にすれば,看護婦 1 人当たりの病床数の値が下がることは訪問看護サービスの拡大につながり,看護婦の職域を広めるものといえるだろう.職域が水平方向に拡大しない場合は業務の軽減または管理職の増加,専門看護婦の増加等垂直方向への職域の拡大が考えられ,いずれの場合も看護業務の高度化,専門化を示唆する指標になる可能性が考えられる.しかし,今回の研究では訪問看護の業務についての調査を行っていないため,今後,さらに検討する必要がある.

２．看護業務の法的比較

イングランドの病院では,1910 年頃から 1970 年代後半まで,無資格看護婦は約半数を占め,現在でも 3 分の 1 存在している.1980 年代から有資格看護婦が増加してきたが,その背景には,1973 年から NHS の管理チームに看護婦が参加できるようになるなど,看護婦の質の維持,向上が求められるようになったことが考えられる.

資格業務レベルの維持は,日本の場合看護業務の質の低下により看護婦規則を作った経緯から容易といえるが,イングランドでの Project 2000 の目的は看護の質の向上にあり,名称独占によってはレベルの維持が困難であることが裏付けられる.Skill mix の提唱および看護スタッフが 1980 年代始めまで無資格看護婦によって過半数を占めていたことより,他職種との関係が不明確であり,労働力が得やすいことが裏付けられた.日本では養成段階で特定の分野のみに偏った教育は行われていない.仮に,日本で同様の制度,教育を行うとすれば,就職先が制限され,病棟間の移動がほとんどなくなる可能性がある.

３．在宅看護に対する日本の過去と現在の比較,イングランドの在宅看護の変遷

在宅看護は現在医師の指示が不必要とされるのは,「療養上の世話」に限られ,その定義が曖昧であり,介護保険法の訪問看護事業と訪問介護事業の境界領域を明確にすることが必要になる.派出看護婦と異なり,訪問看護婦の訪問時間は短時間で,訪問介護や入浴サービスなどの社会資源の有効利用が必要となるため,訪問看護婦が介護支援専門員の資格を取得することが期待される.イングランドでは看護婦の業務独占がないため,福祉職員が訪問看護的行為を行うことの規制は,公法上のレベルでは存在していない.それに対して,日本では境界が不明瞭にせよ,介護職が訪問看護的活動を行うことは制限される.

論文要旨

題目　メチシリン耐性黄色ブドウ球菌の院内感染および
　　　その防止に関する研究

指導教官　杉下知子教授

東京大学大学院医学系研究科
　　　　　平成10年4月進学
　　　　　博士後期課程
　　　　　健康科学・看護学専攻

氏名　森那美子

<はじめに>

院内感染とは，「病院内での微生物接種によって惹起された感染」を指す．院内感染を防止するには，他の感染症防止対策と同様に，感染の三要素である感染源・感染経路・宿主を制御する必要がある．病院内には感染源・感染経路・様々な程度の易感染宿主が多数存在する．また感染源である患者は宿主にもなりうる．したがって，院内感染は様々な様式で起こりうるため，院内感染防止対策は柔軟なものでなければならない．

院内感染症起因菌の中で黄色ブドウ球菌は，菌血症の16.5%，創部感染の17.1%，呼吸器感染の16.1%を占め，いずれにおいても主要な起因菌である．黄色ブドウ球菌の中でも，メチシリン耐性黄色ブドウ球菌（MRSA）は治療に有効な抗菌薬がほとんど無いことから，院内感染防止対策上重要である．T病院は，1979年に初めてMRSAを検出した後，常在的に同菌の検出が続いている．院内サーベンランスの始まった1989年以後，感染制御活動により大幅に減少したが，1992年以後はほぼ横ばい状態で，これ以上の制御が困難な状況にある（Fig.1）．したがって，院内感染防止対策上，現行のMRSA対策（手指消毒・手洗い・手袋およびマスクの使用・ガウンテクニック・環境整備・器材消毒・隔離など）を徹底させるとともに，あらたな方策の立案・実行が必要となった．今回は，「院内感染防止対策により院内感染を防止すること」および「今後の院内感染防止対策に有効な知見を得ること」を目的として，問題解決指向型の院内感染防止対策の手順「情報収集→分析→対策の立案→対策の実施→対策の評価」に則り，以下の研究を行った．

＜研究 1. 情報収集：T 病院で分離した MRSA の生物学的・分子疫学的解析＞

T 病院に出現している MRSA の生物学的および分子疫学的背景を明らかにする目的で，1998 年 4～5 月に入院患者から分離した全 MRSA に対して，生物学的指標（コアグラーゼ型別試験・薬剤感受性分類［EM, CAM, MINO, AMPC, MPIPC, CEZ, GM, AMK, LVFX, IPM, ABK, VCM ］）・分子疫学的指標（Pulsed-field gel electrophoresis ; PFGE）を用いて疫学調査を行った．被検菌株 92 株中，コアグラーゼ II 型が 86 株（93.4%）で，他 III 型 3 株・Ⅳ 型 1 株・VII 型 1 株・分類不能 1 株であった．薬剤感受性分類では，ABK・VCM には全ての株が感受性であった．次に MINO および GM・AMK・に感受性を示す株が多く，この両者あるいはどちらかに感受性を示したものが 86 株（93.4%）あった．また，被検菌は平均 8 薬剤に対して耐性であった．PFGE では，被検菌の 30.4%が同一のバンドパターンを示しており，これらの株を TICS と命名した．PFGE バンドパターン上，TICS と同一起源である株（TICS Family，7 パターン）もあわせると，全被検菌の 56.5％を占め，それ以外のパターンを示す株（non-TICS，30 パターン）と比較して優位であった．TICS および TICS Family は T 病院 24 病棟中 16 病棟で出現していたため，院内流行株と位置づけた．

＜研究 2. 分析：T 病院院内流行株と院内感染および outbreak との関連の探索＞

T 病院における MRSA，特に院内流行株の動向を明らかにする目的で，院内流行株と 1998 年 1～6 月における院内感染および outbreak との関連を探索した．本研究では，「1 病棟で 25 日間に 3 人以上の新規 MRSA 検出患者が発生した場合」を outbreak とした．1998 年 1～6 月に，T 病院では院内感染すなわち，新規 MRSA 検出患者が 114 人発生した．outbreak は 8 病棟で 9 件発生し，そのうち 7 件に院内流行株が関与していた（Fig.2）．outbreak で検出した株（55 株）と outbreak 以外で検出した株（散発株；59 株）との比較では，院内流行株は outbreak 時に有意に増加していた（$p<0.01$）．したがって，院内流行株は院内伝播しやすく，outbreak に関与していると推定した．

＜研究 3. 分析：院内流行株の起源の探索＞

院内流行株の起源を探索する目的で，T 病院に 1988 年 1～12 月までの期間に入院していた患者から分離し，保存されていた全ての MRSA70 株について，PFGE を行った．この時点では院内流行株 TICS は存在せず，TICS Family 2 パターンが 1 株づつ存在していたのみであった．1998 年に出現した院内流行株以外のパターンを示す株（non-TICS）のうち，1988 年には 5 パターン（4 株・1 株・1 株・1 株・1 株）が出現していた．TICS は 10 年前には存在せず，1988 年から 1998 年の間に，TICS Family あるいは他の起源から派生したか，市中あるいは他医療機関から持ち込まれ，研究 2 に示したように outbreak を繰り返し，院内に伝播・拡散したと推測した．また，10 年の期間を経て同一のパターンを示す株が存在したことから，これらは院内に定着した株で（hospital strain）あると推測した．

<研究4. 分析：院内流行株TICSの拡散性に関する特性の検討>

院内流行株は，T病院に広く拡散しoutbreakを起こしていることから，伝播に有利な特性をもつ可能性があると考えた．MRSAは接触感染で伝播する．感染源から遊離したMRSAは，宿主に付着するまで何らかの感染経路中に留まり，感染の機会を待つ．そこで，乾燥条件下における生存能力と，消毒薬に対する感受性を検討した．乾燥条件下では，無栄養時および栄養存在時（50％ウマ血清添加時）ともに，TICSとnon-TICSでは生存率に差を認めなかった．消毒薬感受性試験では，低濃度（0.005％）クロルヘキシジンに3分間接触した時は，TICSの生存率が有意に高かった．したがって，不適切な消毒薬の使用によって，TICSが選択された可能性がある．またMRSA感染症治療にバンコマイシン（VCM）の静脈注射を用いていることから，VCMへの感受性試験を行ったところ，TICSとnon-TICSの中央値はともに1.0 μg/mLで，最頻値はそれぞれ1.0 μg/mLと0.75 μg/mLであった．MICの分布に有意な差を認めた（$p<0.01$）．VCMの通常使用濃度より低い濃度での現象であるため，VCM治療によってTICSが選択され拡散したとは考えられなかった．低濃度クロルヘキシジンおよび低濃度VCMへの抵抗性は，TICSの拡散性を説明する主要な特性ではないと思われるが，non-TICSと生物活性に何らかの違いがあることを示すものであり，その特性の違いを反映する現象であろうと考えた．

<研究5. 対策の立案・実施・評価：T病院胸部外科におけるoutbreakの制御>

院内流行株がoutbreakに関与していることから，outbreakの制御によって院内流行株の拡散を制御できると考えた．調査期間中に胸部外科病棟でoutbreakが進行していたため，制御策としてムピロシン（MUP）ブランケットユースを実施し，効果を検討した．介入後outbreakは収束し，新規MRSA検出患者が有意に減少した（$p<0.01$）．したがって，MUPブランケットユースの有効性が認められた．

<結論>

今回の研究により，T病院におけるMRSAによる院内感染について，以下が明らかになった．

①T病院には分子疫学的に優位な株（院内流行株）が存在し，院内に広く分布している．
②院内流行株は，outbreakに関与している．
③院内流行株は，10年前にT病院には存在せず，この10年間のある時点で出現し，院内に拡散した．
④院内流行株は低濃度クロルヘキシジンおよび低濃度VCMに対して抵抗性を示す．
⑤MUPブランケットユースによって，院内流行株の関与するoutbreakが制御できた．

以上をふまえ，今後は既存の院内感染防止対策とともに，消毒薬および抗菌薬の適正使用の指導・確認，適宜MUPブランケットユースを行い，院内流行株を含めたMRSAの院内感染防止対策を推進していく必要があると考える．

また今後，院内流行株の起源および周辺地域への広がりについて調査し，出現頻度や臨床での振るまいを把握して，出現の危険度やベースラインを設定すること，および拡

散性を説明する性質についてのさらなる検討が必要であると考える.

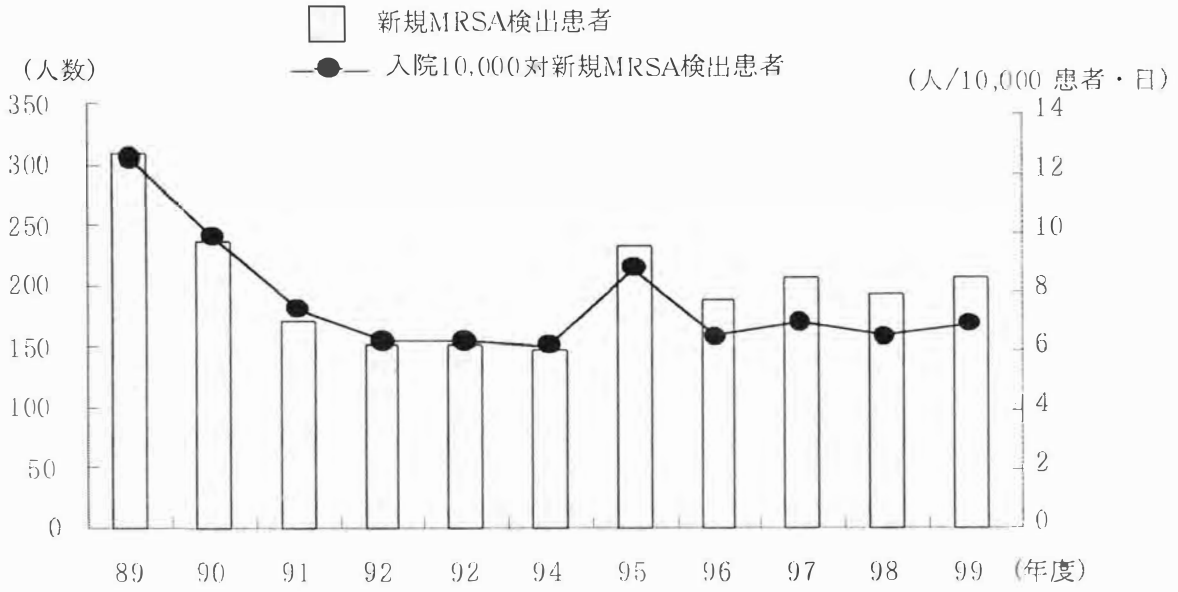

Fig.1 年度別新規 MRSA 検出患者数

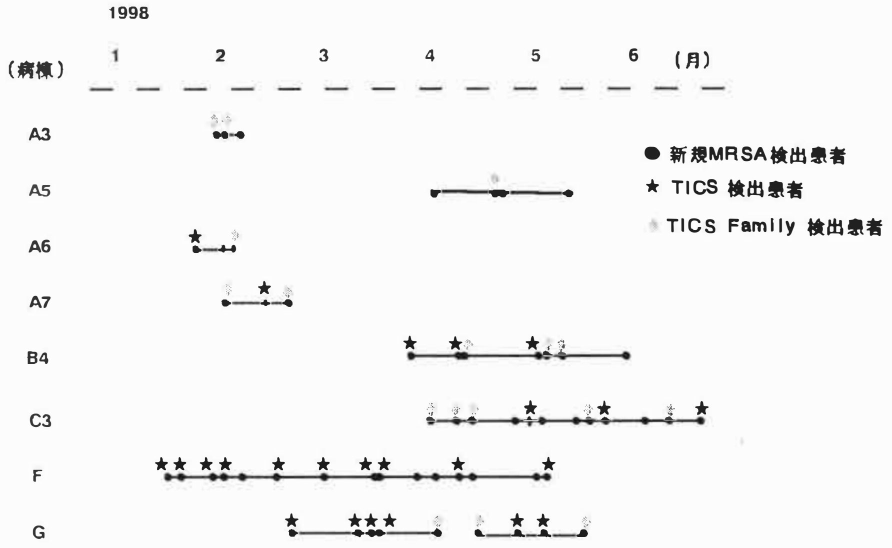

Fig.2 1988 年 1～6 月までの各病棟における outbreak 発生状況

乙12-36　内藤 直子 論文内容の要旨

相対心拍率からの産婦のリラックス度の簡易判定法に関する検討

本研究の目的は、産婦のリラックスの程度を簡便に客観的に評価する方法を確立することである。

研究方法としては、リラックスの程度を判断するゾーンを21例の産婦を対象に、分娩の経過に伴って観察した心拍数から求めた相対心拍率（RHR%）で判定表を作成した。相対心拍率とは、安静時心拍数をベースライン（0％）とし、最大心拍数を100%とした比率で表したものである。分娩経過を17時相として、それぞれに相対心拍率を算出して、年齢別および分娩経験の有無別に、判定表を求めた。

結果は、相対心拍率を22歳～35歳までの年齢ごとに、および初産婦と経産婦別に30種を作成することができ、リラックスの程度を３段階として、カラーで表示するようにした。４例の産婦に適用を試み、質問票によるリラックスの程度とよく一致しており、実用可能と考えられた。

教室員（1999年4月～2001年3月）

教授	杉下 知子	
講師	山本 則子	（2000年4月～研究休職中）
	法橋 尚宏	（2000年4月～；～2000年3月助手）
非常勤講師	高橋 真理	
	田中 哲郎	
	鳥居 央子	
	須貝 佑一	
	渡辺 裕子	
	石井 享子	（1999年4月～）
助手	前原 邦江	
	小林 奈美	（2000年7月～）
技術官	秋山 照男	
事務補佐員	関水 可奈	（～2000年3月）
	滝沢 枝里	（2000年5月～）
大学院生　博士	森 那美子	
	釼物 祐子	
	河田 みどり	（2000年4月～；～2000年3月修士）
	松井 典子	（2000年4月～；～2000年3月修士）
修士	平田 牧子	（～2000年3月休学）
	日下 修一	（1999年4月～）
	杉山 智子	（2000年4月～）
	福田 泰子	（2000年4月～）
	松本 和史	（1999年4月～休学中）
	深堀 浩樹	（1999年4月～休学中）
客員研究員	手塚 圭子	
	吉永（山田）亜子	
	大谷 尚子	
	河原 宣子	
	西岡 光世	
	大嶺 ふじ子	
	伊藤 和子	（2000年4月～）
	山下 仁	（1999年4月～）
研究生	田中 美起	
	大脇 万起子	
	内藤 直子	（2000年4月～；～2000年3月客員研究員）
	金 夏東	（2000年4月～）
	玉村 一郎	（～2000年3月）
	浜町 久美子	（～2000年3月）

家族看護学教室　年報　第4号

発行年月　平成13年3月26日
発行責任者　〒113-0033　東京都文京区本郷7-3-1
東京大学大学院医学系研究科家族看護学分野
東京大学医学部家族看護学教室
TEL:03-5841-3694／FAX:03-5802-2960